貴く翔べ

風雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貴く翔べ

【Ｎコード】
Ｎ５９８４Ｚ

【作者名】
風雷

【あらすじ】
突然、異世界に放り込まれたらどうしますか？　その世界が耐えられないほどに理不尽だったらどうしますか？　あなたは、それに立ち向かいますか？　【更新状況】２０１１／１２／２７　第二章（９）～（１０）追加

第一章「原初の声」（1）

湯山翔（ゆまかける）という男がいる。よく間違えられるが、「ゆやま」ではない。

背は高く、痩躯（そうく）である。目つきが少し悪いが、笑うと大きな笑窪（えくぼ）ができる。鼻筋がしっかりしていて、よくみてみると美顔であるようにもみえる。ただ、猫背なのと腹から声を出さないせいで、彼を遠くから見た人は、なにやら陰気な印象を受ける。

話してみるとわかることだが、非常におしゃべりで、自分の得意な話題になると何時間でも話し続ける。相手が聞いているかいないかはどうでもよいらしく、それもそのはずで、彼は話しながら自分の考えをまとめる性質（たち）なのだ。その典型として、他人の話――特に自分が興味を持てない話題――を聴かない。会話イコール思考であるこの人種は、実に自由詩的な――つまるところ非機能的な――思考回路を持っているのだが、それ自体が言語を超越した自己完結に終始しているために、論理立てての熟考やディベートなどに関しては哀れなほどに無能だ。この手の人間は自分の知らないところで敵をつくるが、どこか憎みきれない一種の愛嬌（あいきょう）も持ち合わせている。

湯山は本が好きだ。

とはいえ、小難しいものは読まず、やや現実離れした歴史ものなどは彼の嗜好（しこう）によく合っている。

二十六という年齢は、冒険や幻想を現実に持ち込みたくなるくらいに憧（あこが）れるには、随分と遅い。故に彼は、精神が子供じみた憧憬（しょうけい）を脱ぎ捨てることなく年を重ねてしまった者の一例として、書物から故人の生き様を知り、それを楽しむ事で自分の人生の心細さを慰めている。暇な時間に歴史小説などを取り出して、それを読むくらいでしか、湯山は生きる虚しさを忘れる術を知らなかった。

「湯山の血は古いぞ」

と、足が悪いくせに未だに警備員の仕事を続ける父が、酒臭い息

と一緒に吐く言葉が、湯山にとってはやりきれないことがある。
どうやら、湯山家は何代か前には大陸に住んでいて、遡ればどこかの王家に繋がっているらしい。父が言うには、湯山はもとは唐山（とうざん）であり、これは大陸の洒落（しゃれ）た呼び名である。
「アホくさ……」
湯山家の現状を知れば、彼の嘆きもわかるだろう。何百年も昔の王侯貴族の後裔らしいこの家は、どう考えても豊かではなく、当の父は安月給の警備員で朝も夜もなく働いており、派遣社員を勤める湯山自身も、ひとつどころに留まることもできずに、昨日知り合った相手に顎（あご）で使われる日々をすごしている。
その癖、父から実を伴わない家格ばかり言い含められたせいか、妙に誇り高い。
分不相応というべきだろう。幼い頃、少しばかり勉強ができたことで、母が期待をかけ過ぎたせいもあるが、とにかく湯山は高校時代に挫折を味わい、大学に進学しても周囲に溶け込めずに、学費を稼ぐという名目でアルバイトに打ち込み、ついには退学してしまった。
それでいて人に使われたくないという戯言（たわごと）を抜かす男に、何かを報いるという機能を、世間は持っていない。
「もうちょっと高けりゃなぁ……」
給与明細を破り捨てながら、つぶやく。湯山はこんな男だった。
世間が自分の能力を生かすように出来ていないのだ――と思うほどには、湯山は世間知らずではない。人の能力とは、その者が革命家か芸術家でもない限りは、人間社会にどう適応するかで優劣が決まる以上、右の言葉は自分の無能を棚に上げて、賢（さか）しらに叫んでいるに過ぎない。そんな恥ずかしい真似をしでかすほどには、この男は馬鹿ではない。
誇り高いと書いたが、周囲から見るとそうでもない。他人に馬鹿にされても、へらへらと笑っているだけで、およそ湯山の周囲の人間はこの男が怒っているところを見たことがない。ただし湯山本人

は自分が短期であることを自覚しており、それが露わになるような状況を常に避けている。
湯山は自分が時々わからない。
――あなたはこうなのよ。
と、やさしく――あるいは厳しく、指し示してくれる恋人や友もいない。彼らも多分、湯山のことがよくわからないのだろう。だろうどころか、面と向かって言われることすらある。
「――てめぇは自分のことがわかるのかよ？」
そうやって言い返してみるが、はっきりいって湯山にはどうでもよかった。自分のよくわからない箇所、というのは何やら気宇の大きな人みたいで、どこか好いていた。こういう意味では湯山は自分が好きな人間である。
彼にとっての一大事は、よくわからない自分のことではなく、生きていることに退屈を感じ始めた自分がいることだった。
以前はインターネット上で特定の人物がバッシングされているのを見ても、祭気分で無意味に騒ぎ立てる連中に腹を立てたが、最近は彼らに近い視点でものを見るようになった自分に気づいた。
――滅びろ。滅びろ……
自分が下衆な趣向を喜ぶようになったことよりも、人の不幸を楽しむ理由がただの退屈であったことが、はっきり言って湯山には苦痛だった。
「つまらない……」
自分の生き方が、何よりましてつまらない。

退屈は人類の敵である。
と、いいたくなるのは、湯山が――その小心さからはちょっと考えられないが――面白さ目当てに悪事に手を染めたことだ。
勿論、当の本人は金目当てのつもりだが、少し頭を働かせれば、ほんのはした金を得るのにわざわざ危険と罪悪を同時に担ぎ込む必要はない。こういったものに首を突っ込む楽しさは、大抵の人間は

十代の頃に脱ぎ捨ててしまうのだが、平穏かつ陰鬱な学生時代を過ごしてきた湯山にとって、これは眩(まぶ)しいくらいに新しい体験だった。

（悪いことをすれば、いずれ捕まる……）

捕まるのは悪事を続けるからだと、湯山は思い込んだ。なに、右も左もわからない老人から小遣いを貰うだけだと、湯山はかすかに芽生えた罪悪感を握りつぶした。

（俺は器が小さい……）

と、湯山が頭を抱えたくなるくらいに悩んだのは、老人をだまくらかして小金を得たことではなく、結局のところ罪悪感に耐えかねた自分が、盗んだ金を丸々老人に返してしまったことだ。無論直接ではなく、郵便受けにしのばせるという、いかにも小心丸出しの方法で。

「退屈でなけりゃぁ、良いのさ」

自分を慰めても虚しさは止むどころではなく、さらには冷や汗をかくほどに怖気(おじけ)づいているのは、彼が同じく悪事に手を染めた仲間を裏切ったからだ。湯山の知り合いの中でもずいぶんと性質の悪い男で、今回の失敗をだしにこれから付きまとわれるようになるかもしれない。

（逃げたい！）

と思ったのは一瞬で、すぐに腹が据わった。熟考して覚悟を決めたのではなく、思考を停止することで結論を早めたのだ。湯山にはこういう想像力の欠陥からくる楽観癖がある。

第一章「原初の声」（2）

いつものようにボロ車を出して会社へと向かう途中だった。

案の定、例の悪友につけまわされた。

悪友にも彼なりの事情がある。こういった悪い話を手軽に持ち込んでくる輩は、往々にして他にも繋がりをもっており、湯山が失態を犯したせいで責任を追及される立場に陥った。湯山の人の良さにつけこんで、とりあえずは利用してみたが、彼も流石に人選を誤ったことを後悔した。

（脅すか……）

窮まれば湯山から金を毟り取ればいい。あんな小心な男、少し脅かしてやれば、自分可愛さに誰でも騙す様になるだろう。出来なければ湯山の親をゆする。それだけの単純な作業だ。

「まずは挨拶代わりだ」

そういって、悪友は湯山の乗る車を追い回した。この行為自体に大した意味はないが、湯山の恐怖心を煽り、「この男からは絶対に逃げられない」という強迫観念を植え付けるために必要な、一種の儀式である。

湯山がバックミラーから覗き込んだのは、そんなことを事も無げにやってのけようとしている悪友の姿だった。鼻筋と目が細く、長い顔である。嗤うと目元に怪しいしわが出来る男だ。

「木田、てめぇ。嗤ってやがる！」

心のどこかで悪友のことを軽蔑してきたせいか、恐怖よりも先に怒りが立った。

会社までついてこられては叶わないと、信号が切り替わるとともにアクセルペダルを勢いよく踏んだ。早朝であることもあって、少し混み気味だが、下手に空いているよりは撒きやすい。湯山は強引に割り込みを繰り返して追尾する木田を振り切ろうとした。だが、相手もこういった手合いはお手の物だろう。吸い付いたように離れ

なかった。
しきりに携帯電話が鳴っているが、見ずともわかる。
次第に双方ともなりふりかまわなくなった。あたりの目を憚(はばか)らずに猛追と逃走を始めた。
流石の湯山も退屈を捨て去った自分を感じる暇はなかった。大抵、退屈を嘆く人間というのは本質的に平穏を愛しており、しかし時間の使い方という、人間の価値そのものとも言うべき一点において、哀れなほどに無能あるいは無頓着な場合が多い。湯山もその一人だった。
携帯電話が鳴っている。
「あれ？」
違和感。
これ以上にないほどに非日常にいるのだから今の湯山は違和感で埋め尽くされているといってよい。それにすら慣れ始めた頃、湯山は眼前に最も訝しい現象を見つけた。
（こんな音、俺じゃないぞ……）
携帯電話がけたたましく鳴っている。それが木田からのものであることは間違いない。だが、その音とエンジン音に混ざって、脳を貫くような裂音が聞こえる。
（いや、やっぱり携帯が鳴ってる）
耳障りなアラーム音に混ざって、それは確かに聞こえる。木田のせいで携帯電話が壊れたと思った湯山だったが、つい気になって、手にとってしまった。
「朝っぱらから一体何なんだよ。てめぇはよ！」
車内に湯山の怒号が響いた。
だが、繋がった先は木田ではなかった。
――……こそ
風鈴の音のようなか細い音が静かに響いた。どうしようもないほどの目まぐるしさの中にいるのに、どういうわけか、湯山はそれを聞き取ってしまった。

「こそ？」
顔が熱を帯びてきた。自分の発した言葉がどこかでこだましているような感覚がする。
――……こそ……よ……そ
（女の声……いや、子供か？）
それも一人とも思えない。受話器の向こう側に数人の気配のようなものを、湯山は感じ取った。
すぅ――と、あたりが静かになったと思ったのは、湯山の神経が片手にとった携帯電話に集中していたからだ。だが、次の瞬間、湯山を覆っていた静けさが一気にはじけた。
――……よう……そ……こそ……うこそ……ようこそようこそようこそこそようこそこそようこそ……
「うわぁ！」
叫ぶと同時に、目の前が真っ白になり、暗くなった。

――どこだ。ここは？
などという、古典的な台詞を吐くようには、湯山は出来ていなかった。
「おおぉ？」
奇声なのか悲鳴なのか、どちらつかずの声をあげた湯山はみだりに車外に飛び出すような真似はしない。
何せあたり一面荒野である。所々、茫々（ぼうぼう）と草が茂っていて、他はやや乾いた黄土が見える。もちろん、道路らしきものはない。上を向けば、雲ひとつない、死んだように蒼い空が広がり、太陽の光だけが異様にまぶしい。
ほんの数秒前まで、都心を車で走っていた自分が、何故こんなところにいるのか。
（神隠しか、死んだかだな――）
後者だとすれば、あの世も随分と殺風景なところだ――と、湯山は鼻で嗤った。別に湯山は抜けているわけではない。もし傍に道連

れになった誰かがいたとしたら、その者に抱きついて絶叫しただろう。
たった一人である――ということが、湯山がパニックを起こさない唯一の理由だった。とはいえ、周囲に自分と同じように、この怪異に巻き込まれた人がいないかは、静かな雰囲気とは裏腹に顔面を蒼白にして確認した。この男が他人からよくわからないと言われる所以のひとつは、自分の表情を自覚していないことだろう。周囲を一望して誰もいないことを確認すると、小さく嗤ったのだ。
勿論、こけおどしだ。こうやって自分で自分を励まさなければ、どうにかしてしまいそうだ。
――木田を撒けた。
という事実によって得た安心も少しはあった。最悪の状況を考えれば、見も知らぬ土地にいきなり迷い込んで、しかも木田と二人きりという可能性もあった。この期に及んであんな顔を見ずに済むなら、ひとりの方が良い。
ふと、携帯電話を手にとって見てみた。あまり期待していなかったが、電波は届いていない。最後の着信は木田になっており、あの妙な女か子供のような声は何だったのかは想像すら出来ない。
少し、車を走らせてみたが、凹凸のひどい地面のせいか、すぐにエンストを起こした。無闇に燃料を消費するわけにはいかず、冷房を切ったために、燃えるように暑い。それでも湯山が車外に出なかったのは、ひとつは草陰にたむろする狼の群れを遠望したからだ。
「はは、洒落(しゃれ)になってねぇや……」
ようやく、と言うべきか、湯山は事態の深刻さを飲み込んだ。
全く未知の世界に放り出されたわけだが、せめて（木田以外の）人の姿を見つけたい。
しばらく走ると、日が暮れてきたので、湯山は車内で夜を過ごすことにした。勿論、周囲の景色は一面の荒野であることには変わりない。
それでも何か心細かったのか、地面から生えたような大岩の傍に

車を停めた。樹木の傍は虫に集(たか)られそうで気がすすまなかった。
「隣、空いてますか？」
などと、大岩に向かって空元気に話しかける姿は、もはや哀れですらある。
昼食にとるはずだった安い菓子パンを口に放りこみながら、湯山は考える。この暑さではすぐに腐ってしまうから、明日の朝食に残すことは考えなかった。ただ、ペットボトルに半分ほど残った水は節約した。
（突然、地球の裏側に飛ばされたか、異世界ファンタジーか、あるいはタイムスリップといったところか。あ、あの世って線もまだあったな）
自分の置かれた境遇にあたりをつけようと始めた想像は、夜陰の中で砕かれた。
風音もしない夜の闇の中で、小さく煌(きらめ)く光の群れを見たとき、湯山はなにやら怖気(おぞけ)だちそうな自分を励ますように、いくつか浮かんだ言葉の中で、最も雅味のあるものを選んだ。
（蛍かな……）
湯山は、光の群れが移動しているらしい事になかなか気づかなかった。それらは徐々にこちらに近づいていた。それに気づいたとき、湯山が動転しかけたのは、余裕のある言動とは裏腹に、この男の精神がつつけば破裂するほどに緊張していた証拠である。
――誰かいる……誰かいるよ。
耳元でささやくような声が聞こえた。いや、果たして声であったか。自分の耳が何かを捉えたという感覚はない。直接頭に響いてくる言語を超えた何かは、湯山がこれまで一度も体験したことのない不愉快な現象だった。
後部座席のシートを倒してくつろいでいた姿から、一瞬で起き上がると、慌ててキーを回し、エンジンをかけた。
旋回するまで、隣席を失礼していた大岩に二度ほど尻をぶつけた。湯山は百八十度回転すると、真っ直ぐに走った。

しばらく走らないうちに、段差に乗り上げた。ライトをつけているが、こうもだだっ広い場所では十メートル先が見えたところで何の意味もない。

――ふふっ……慌ててる。

――慌ててるよ。

頭に直接響いてくる声らしきものは、どうやらその光から放たれていることを湯山は感じ取った。脳を撫でるような意思の切れ端が、陽光が分解されて七色に見えるように、いくつかの色を伴っているようにも思えたからだ。

（さっきの声だ……）

携帯電話から聞こえた常軌を逸した多数の声。いや、あれは声であったか。今と同じように直接頭に響いてきたのではないか――と、そこまで思念をめぐらせた湯山だったが、ついに車を捨てて奔（はし）り出した。夜光でも照らしきれないだだっ広い荒野に単身飛び出したのだから、これは逃走というよりは狂走であった。

――あ、逃げた。

――逃げたわね。

光は迷うことなく湯山を追尾してきた。

湯山は脇目もふらずに奔った。だが、ここは彼の歩きなれた、神経質なほどに平らに舗装された道路ではない。地が平坦であるというのは人界だけの話であり、荒野の地面はジャガイモのようにぼこぼこでとても人が歩けるようにはできていなかった。何故、広大な世界に人はわざわざ道という線を引くのだろうと、幼い頃疑問に思ったことがあったが、文明に浸（つ）かりきった人類は自分が平らにした道しか歩けないという事実をここで痛感した。自分がいかに文明を享受した人間であったか。

凹凸に足を突っ込んで転ぶよりも先に、湯山の足腰が悲鳴を上げた。一歩踏み進むごとに足首が砕ける錯覚をおぼえるほど、ここは文字通りの荒野であった。

ついに、しゃがみ込んだ。いや、がむしゃらに走ったせいで、立

ち止まった瞬間に腰から崩れた。呼吸が乱れ、どれほど空気を吸い込んでも足りなかった。
――座った。疲れたんだよ。
――これで終わりかな、遅い人。
――選んで。ねぇ、選んで。
光の群れが湯山を囲んだ。
羽虫のようにあたりを不規則に旋回し始めたそれらを見て、湯山は不機嫌に乾いた息を吐いた。
「うるせぇ。うるせぇよ……」

第一章「原初の声」（3）

湯山は過呼吸で意識が飛びそうになる中、辛うじて周囲を確認した。

黒い画板に白い絵の具を撒き散らしたように不自然な光が周囲を漂っている。それもひとつやふたつではない。

――妖精。

という言葉が、湯山の頭に浮かんだ。あるいは幽霊や得体のしれない生き物であるかもしれないが、怪談話が苦手な性格もあってか、よくわからないのなら妖精でもいいだろうとも思った。

妖精なら――と、安心できたならば、湯山の精神はよほど大雑把に出来ているといえたが、たとえ呼称を知っていたとしても、現実にはいないはずのそれが突然目の前に現れた事実は、一個の人間を混乱と恐怖の淵（ふち）に突き落とすには十分だった。

あるはずの物が無い――あるいは無いはずの物がある時、人は多くの場合、恐怖を覚える。事の大小はあれ、自分の信じる世界の物理法則が砕け散ったような錯覚がするからだ。

湯山が辛うじて意識を保っているのは、彼がこのショックに経験があるからだ。ほんの数時間前に自分が体験した奇怪な出来事に比べたら、妖精の存在など取るには足りなかった。

現状、湯山にとっての一大事は、この妖精達が、自分を害するようなことがあるかどうかだ。

湯山が宙を漂う光のひとつを睨（ね）めつけて観察していると、周囲から小さな声が上がった。

――選ばれた。選ばれたよ。

――目が合ったね。

――はやいね。はやいね。

全て子供のような無邪気な声であったが、闇の中でのそれはいかにも怪しかった。

湯山が見ていた光が、小さく揺らめいた。すると、蝋燭(ろうそく)の灯を吹くように、その周囲の光たちが一斉にかき消えた。

――ようこそ。

この台詞には聞き覚えがあった。とはいえ、最初に聞いたときは半分パニックに陥ったから良い印象は無い。

「妖精か何かか？」

周囲の光が掻き消えたことは、湯山が精神を安定させるにおいて十分に役に立った。

すぅ――と、光が近寄ってきたので、湯山は思わず振り払ってしまった。光に触れたという実感は無かったが、振り払った手が怖気だった。

――ユマ……

自分の姓を呼ばれた――と感じた時、湯山はこの超常の何かに抗うことへの意味を疑い始めた。

「何で俺の名字を知っている」

湯山の問いには、光は答えなかった。ただ、壊れた機械のように同じ事をつぶやき始めた。つぶやくといっても、湯山の頭の中に直に声に似た何かが響くだけだが。

ふと、湯山はこの光には自我がないのかと思った。あるのは何かの本能だけで、これはそれを行っているだけなのではないか。先に光同士で会話をしていたように感じたのは、湯山がそう思っていただけで、各々が別に湯山の頭に語りかけてきたのかもしれない。

これは、現象なのだ――と、湯山は思うようにした。日が昇れば野一面を朝日が照らすように、この世界では生物という存在以前の何かなのだと思った。

それと符合するわけではないが、湯山は蜻蛉(とんぼ)を誘うようにして右手を差し出した。どういうわけか知らないが、そうすべきだと思った。

湯山に振り払われて迷うように宙を漂っていた光が、指の先に止まった。

――荊(いばら)を……

湯山が脳内でそう訳すしかない何かをつぶやくと、光は死んだ蛍のように消えた。

自分はこの世界における普遍的な何かを今、受け取ったのだと思った。誰に聞かれても説明できる自信はないが。

明くる日の朝、湯山はあてどなく車を走らせた。

幸い、給油直後であるためにしばらくは走れる。だが、起伏の激しい悪路は車自体よりも湯山本人に対する負担が大きく、地形の突起の見づらい草原部を迂回し、禿(は)げた地面の続く荒野を走った。それでも一時間に一回は気分が悪くなり、停車しては車の外でうずくまって吐いた。三回目は吐き出すものは何もなくなっていた。

水が足りない。

小川は見つけた。だが、無用心に川の水を飲むわけにはいかない。

（それはいざという時だ。俺みたいに頑丈でない人間だと一発でアウトだ）

時々、貧相な木に実がなっているのを見かけたが、それが食用に耐えられるかどうかは分からない。

（つくづく、食い物が向こうからやってくる暮らしをしてきたんだな……）

対価さえ払えばすぐさま食事にありつける世界が、実は途方もないものであったのではないかと、湯山は思うようになった。

「とにかく、人だ」

人間を見つけなければ話にならない。湯山はこの世界で生きる術を知らないのだから。まずは模範というべきこの地の住人を捜すことが、彼の第一の目標だった。それ以上に、自分という存在を保護してくれる何かを探していた。そもそもこの地に人がいるのかどうかという疑問は捨てた。必ずいる。そう思わなければ正気を保てそうにない。

半日も走らないうちに、車の方が先に音をあげた。燃料が尽きた

のではなく、車体が歪むような悪路を走り続けたことによる。
「お上品な道しか走ってこなかったもんな。中古ワゴンだとこんなものか……」
皮肉めいた台詞を吐いても、虚しいだけだった。自分を外界から守ってくれる強力な夜具も兼ねていたから、これから徒歩で行くことを考えると、途方に暮れた。
（人じゃなくて、食い物を捜すべきだった）
川辺で魚釣りでもして、急場をしのぐくらいの事すら考えつかなかった。第一、食用でないものを体が受け付けないだろうということは、湯山にとっての大前提であった。とはいえ、そこいらに見知った果実がなっていたり、調理された肉が落ちていたりするわけがない。
このような危機時であるのに、そういった甘えの中にあるということは、湯山でなくとも自覚しづらい。
まずは野垂れ死にを回避する方法として、日が暮れるまでにやるべきことを決めた。
（火を焚（た）こう）
どうにもやめられない煙草の習慣というものが疎ましくなったこともあったが、今ばかりは感謝した。ライターさえ持っていなければ、火打石以前の旧態で火を熾（おこ）す羽目になっていたかもしれない。
既に茫々たる荒野は抜け、遠くに山霞が見える。近くに小川もあり、所々木々が茂っていた。
枯れた枝葉をたんまりと拾ってきて、湯山は小さな焚き火を熾すと、寒くもないのにそれに手を当てながらしばし考えた。
（人間は何故、山から下りたんだろう……）
短時間であれ平野をさまよった感想といえば、途方もなく広い場所には食料もなく、水もなく、それに比べれば山など貯蔵庫のごとく禽獣（きんじゅう）がいて、木の実や水もあるだろう。それを捨ててまで、人は何を求めて平野へ下りたのだろう。
（きっと増えすぎたんだ）

あるとき、山という空間では増えすぎた人種を賄(まかな)えなくなったのかもしれない。人は自ら進んで平野に下りたのではなく、追い出されたということになる。湯山のこの想像は無論、何かの書物に立脚したものではなく、彼の勝手な想像である。

煙草に火をつけた時、湯山は車に鍋でも積んでおけばよかったと思った。軽装でないと歩けないと思って、気が付いたものしか持ってこなかったから、食事の役に立つものといえば空のペットボトルだけだ。これでは湯を沸かすことも出来ない。

（いっそ、解体して鍋でも作りゃよかったんだ……）

本気でそう思った。今でも生の水を飲むことは怖い。

流石に空腹には勝てず、河で魚を獲ることにした。水を怖がったユマであるから普通に考えれば魚を敬遠しそうなものだが、ここは意を決したと言うべきだろう。知識がない以上、木の実は危ない。

ちょうどいい小川を見つけて、枝と石で堤を作った。子一時間ほど待つと、小魚が堤に入ってきたのでそれを焼いて食った。水藻の臭いがひどく、味も何もなかったが、腹だけは膨れた。

（便所も作らんとな）

木の棒を拾ってきて地面を掘った。出来るだけ深く掘りたかったが、土が固く、途中で諦めた。

そうこうしているうちに日が暮れた。次第に寒気が下りてきて、湯山は車に積んであった毛布に包まったが、ここにきて車を捨ててきたことを後悔した。

（火を絶やさないことだ……）

野天の下で熟睡できるはずもないから、目が醒める度に焚き火に枯れ枝を足した。

（雨が降ったらどうする）

なども考えたが、それ以上に押しつぶされそうな疲労感に襲われて、ついには気絶するようにして寝入った。

第一章「原初の声」（4）

「おい」

疲れていたためか体がだるく、湯山は最初、その声に反応できなかった。

「おい、起きろ。風邪をひくぞ」

と、言われて起きたのは、額に何か冷たいものがあたったからであった。

（雨だ……）

ずぶ濡れになって見る見る衰弱してゆく自分を想像した湯山は、跳ね起きた。

「わっ！」

何かに激突した。

額を押さえて目の前を見ると、自分と同じように額をさすっている男がいる。

（人だ……）

あれほど探し回った人間に出会ったというのに、湯山は安心しなかった。というよりも、警戒した。男の身なりが、多少は湯山も想像していたが、自分の衣服とかけ離れていたことと、どうやら一人ではないらしいことに気づいたからだ。

男は、湯山が中国の時代劇で見たような黒い衣をまとっていた。縁が最も黒く、他はやや色が浅い。髪は後ろに長く纏（まと）めていて、スーツ姿に短髪である自分が周囲から完全に浮いていた。

既に火が消えた焚き火を囲んで数人がいた。皆、湯山と額を激突した男と同じ身なりだった。

湯山が目ざとく見つけたのは、彼らの主か何かが乗っているらしい馬車だった。湯山はこの光景だけで、この世界の人間が、主と従を厳（くら）しく区分する何かから抜け切れていない蒙さを持っているような気がした。この予想が彼を最も警戒させ、しかも後に当たること

になる。
「そこな、旅の人」
馬車の窓にたれたカーテンの中から女の声が聞こえた。その声とともに黒衣の男たちが一斉に跪(ひざまず)いた。
湯山は奇妙な体験をしている自分に気づいた。
先の男にしろ、車上の女にしろ、喋っている言葉は湯山にとって全く耳慣れないものであるのに、頭の中ではそれが理解できるのだ。――ようこそ。
妖精のような何かと触れ合っていた時のように、頭に直接意思を穿つ様な何か。それが全く知らない言語を、湯山が理解することを可能にしている。
(原初(はじめ)に言葉ありき……か)
何かで読んだ一説を思い出すと、湯山は妖精から受け取ったものが何であったかにあたりをつけた。
男の一人が馬車の扉を開けると、中から一人の少女が現れた。
(紅(あか)い……)
髪がやや紅い。少し小柄で、少女のようだが、思わず口元が緩んでしまうような愛らしい顔をしている。目が大きく、可愛げを損なわない程度にそばかすがあり、鼻はこじんまりとしている。衣服は無骨な男たちが蠅(はえ)に見えるくらいに整っていて、青をベースにした幾重かの衣を着重ねている。
「見慣れぬ衣服を着ておられるが、どちらのご出身でしょうか?」
湯山は一人では生きていけない自分を痛感している。寝ている間に雨に打たれていれば、三日もたたずに肺炎を起こし、それをこじらせて死んでいたかもしれない。
ひとまずは行儀のよさそうなこの女に身を寄せることを考えるしかない。どこかの集落に紛れ込んだとして、一から生計を立ててゆく自信など湯山にはない。それよりも、このお嬢様じみた娘に寄生することで急場をしのげれば十分とすべきだろう。
(そのためには、なめられない事だ)

最初から、湯山はそういう目で少女を見ていた。少女にすれば単なる好奇心でこの見慣れぬ男に尋ねたのだが、湯山の方は人知れず必死だった。

「俺にとっては貴方の衣服の方がよほど見慣れない。どちらのご出身か、訊(き)いてもよろしいか？」

ぞんざいな口調で湯山が言うと、少女は驚いたようだ。彼女が小さく頷くのを見て、湯山は自分に宿った神秘的な何かが、内から外に向けても作用するものであると確信した。

（言葉が通じた……）

一安心した湯山だったが、周囲の男たちの顔が一瞬だけ強張ったのを見たとき、わずかに後悔した。素直に状況を説明し、助けを請うべきであったのかと。

少女が、小さく笑った。

「これは失礼。わたくしはローファン伯の長女アカアです。この服は我がオロ王国の婦人であれば、誰でもたしなむ程度のものです」

暗に、この程度のことも知らない貴方は誰なのだ――と言われている気がした。だがそこに悪意が感じられないのは、この娘は本当にそれを疑問としているのかもしれないと、湯山は思った。

（正直に言うか。信じられるようには工夫するとして……）

相手にあまりにも毒気がないので、湯山のほうが馬鹿らしくなってしまった。

伯爵の娘と聞いて多少は気圧された湯山だったが、顔には出さないように努めた。本来ならば表情に出てしまうところだったが、何分顔色が悪く、今の湯山は何を話しても不機嫌そうに映る。

「俺の名は湯山翔。どうやら見も知らぬ土地に放り出されたようだ。乗り物に乗っていたんだが、途中で壊れたので今こうして人里をさがして歩いている」

こういうことを話すとき、湯山はなぜか知らない他人のことを話すように淡白になる。このせいで聞き手に事の逼迫(ひっぱく)が伝わらずに損をしたことが何度かあるが、本人はその原因が自分にあることにす

ら気づいていない。
だが、今ばかりはこれが幸いした。少女アカアの関心をひいたのだ。
それに、湯山が思わずやってしまった動作が契機となった。
突然、耳をつく高音がユマの懐で鳴った。彼はおもむろにポケットから携帯電話を取り出すと、前日に目覚まし代わりに設定していたことを思い出しながら、音を消した。
「ああ、気にしないで。ただの目覚ましだから」
湯山翔という人物を強烈な印象とともに相手に焼き付ける効果が――本人ははからずとも――この行為にはあった。
他にも、ユマが煙草を吸う際に使うライターなどは、大いにアカアの好奇心を刺激した。
「ユマカケル殿は術士であられたか……」
そこからは飛ぶように事態が好転した。車上に誘われたのである。湯山が術士とかいうもの――大体想像は付くが――に間違われた上、その後の問答に決定打があった。
「湯山が氏で、翔が名だ」
氏名で呼ばれると、どこか冷たい感じがして嫌な気分になったために、湯山が意味もなくそういったのだが、どうやら氏を持つというのは特別な意味があるらしく、先の携帯の件も合わさって、ユマという男が妙な存在感を持つようになった。
湯山はアカアと臨席した。
お嬢様の気まぐれで道連れになるということが、何を意味するのか、湯山はこの時大した予想を立てなかった。
香を焚いてあるのか、馬車の中の香気にむせ返りそうになった。
「ユマ先生、ユマ先生」
道中、アカアは湯山のことをこう呼ぶ。もうこれ以降は湯山という漢字は必要ないだろうから、彼のことを単にユマと呼ぶことにする。

車上の旅が快適とは言いがたいが、ユマのように歩きなれない人間にとっては天からの恵みに匹敵した。
「このあたりのことが知りたい」
そう言いながら、ユマはアカアにこの世界のことをさりげなく尋ねた。彼女と接してみて気づいたことだが、ユマはアカアが持つ本に書かれた文字を読むことが出来なかった。
「なるほど、言葉ありきだ」
妙なところで感心してしまったが、とにかく、彼女の言ったことで重要そうなものをメモ帳に書き留めた。アカアにはユマの持つものや仕草の全てが新鮮らしく、目を爛々(らんらん)と輝かせていた。
アカアの馬車に乗るのは一日のうち、ほんの二、三時間ほどで、他はアカアの乗る馬車の後に続く荷馬車の一角をあてがわれた。換え用の馬に乗ればどうかとも言われたが、振り落とされるのが目に見えているので断った。時々、黒服の男たちにまぎれて歩いたりしたが、彼らはユマのことを快く思っていないらしく、ろくに会話もせずに荷馬車に戻った。
「どこへ行くんだ?」
ユマが聞くと、アカアは周囲の景色を確かめるように幌をめくってから言った。
「王都ですわ。実家に帰るんですの」
「君の父はローファンとかいう土地の主じゃあなかったのか?」
「確かにローファンに封じられましたが、王宮勤めであるために王都に居をかまえていらっしゃいます」
ユマは、アカアの父が彼女に似ていることを心底願った。得体の知れない術士が、実はただの難民――というべきだろう――であることがばれればどうなるか。
(とにかく、食いつなぐことだ……)
そう思いながら、夜天の星を数えた。知っている星座はひとつもなかったが、やや欠けた月だけが、故郷のそれを生き映したように浮かんでいた。

第一章「原初の声」（5）

アカアに同乗しての旅は続く。

「ユマ先生は、面白い謡(うた)い方をされますね」

と、アカアが大真面目な顔をしたので、ユマは首を傾げた。

（歌を謡ったおぼえはないけど……）

思わず口に出そうとしたところで、心当たりがあることに気づいた。

アカアの放つ言葉だ。

ユマの放つそれと比べて抑揚が大きく、アカアのお喋りは鳥の囀(さえず)りのようにも聞こえる。彼女が謡っているように感じたことのあるユマは、この国の人間が持つ言語観が歌と称される程度のものであると考えた。

あの奇妙な妖精――とユマは断定している――のおかげで言葉が通じなくとも意は通じるのだ。故に言葉は個性であり、歌曲のように華やかさを伴う文化なのだろう。

――ユマ先生は珍しい言語で話されますね。

と、言われたに等しい。

「そうか、俺の故郷でも（他と比べると）珍しい歌だそうだ」

ユマがわざとらしくそう言うと、アカアは決まったように手を叩く。もはやこのような問答は日課ですらある。

（可愛い娘(こ)だ……）

垢抜けない、筋金入りのお嬢様だ。清水を何度浄化すればこのような透明な液体が出来上がるのかと思うほどに、彼女の人格はまっすぐで、穢(けが)れがなかった。

（ちょっとお惚(とぼ)けさんらしい）

ユマの話に聞き入っているときは別として、時々、愚鈍とも思えるほどに鈍くなる。あえてそういう風に教育されたのかもしれないとも、ユマは思った。

そんな彼女に苛立ちを覚えなくもなかったが、ユマは彼女に聞いておかなければならないことがある。
――夜中、光の群れがやってきて、俺に何かを授けて行った。あれは何だ？
という、直接な表現を用いることをしないのは、この男の奇妙さといえる。
「この辺りには蛍（ほたる）でもいるのか？」
ユマは妖精についてさりげなく訊いた。
「蛍……ああ、源精（げんせい）のことですね」
「源精？」
アカアが聞きなれないことを言ったので、ユマは脳内でそれを上手く訳すことができなかった。
（性能の悪い翻訳機みたいだな……）
源精と呼ばれるものから授かった神秘は、ユマがアカアの言葉を理解することを可能にした。だが、オロと呼ばれるこの王国にはユマの持つ語彙（ごい）を越えた概念や現象が存在しており、それらは生の音としてユマの脳に伝達される。「ゲンセイ」と、生の音で飛び込んできたそれは、ユマが本来の能力でもって翻訳したに過ぎない。ワープロが辞書にない言葉を打ち込まれて誤変換するのと似ていると、ユマは思った。
（あるいは言精か……）
ユマは目でアカアに説明を請うた。
「源精は雷精より発し、人の意思を司ります。常は風精と混ざっていますが、人気を好み、人を介して彼らは増殖と衰退を繰り返します。ちなみに、風精は火精より発します」
つまり、源精とやらが人の意思疎通を援けるのは自らが繁殖を行うためであって、厚意でやっているわけではないらしい。繁殖を行うということは源精は生物の一種ということになる。
アカアの話は続くが、それをユマなりに要約してみた。

風精とは風を起こす精であり、源精は普段それに紛れている。風に飛ばされて遠くに行く様は、あるいは蒲公英（たんぽぽ）の種が風に乗る様を想像すると近いかもしれない。源精は意思を原料として動く。しかも、動物のような単調なものではなく、人間のように複雑怪奇なものを好む。

源精は群れで行動するが、一つの群体で繁殖を行えるのは一個体のみである。というより、アカアが言うには繁殖を行う際に、選ばれた個体は同群体内の他の個体を食い尽くすらしい。寿命は長く、取り付いた人間が意思活動を行う限り、彼らは生き続ける。一種の共生ともいえる。

（道理で団体さんでやってきたわけだ）

このような荒野では人も滅多に通るまい。妖精さんも子孫を作るのに必死だったらしい――と、ユマは小さなおかしみを感じた。自分の体内に何かが宿っているのは多少不愉快だが、害がなく、むしろ有益であれば我慢もしよう。

まだ、問うべきことがある。

「この国では、俺のような変わり者が、突然現れたりすることがあるかな？」

哀れにも自分のように神隠しに遭ってしまう人間がどれだけいるのか。それは現在のユマにとって最大の関心事だ。もっとも、アカアがユマの服装を見慣れない時点で半分諦めているが。

予想通り、アカアはかぶりを振った。

「そうか……」

ユマが持っていたほのかな希望は、一瞬にしてかき消えた。知らないというのは、ユマのいた世界に戻る方法もわからないということだ。

（器用に生きなきゃいけない……）

ふと、思い出したのは、捨ててきた車のことだった。ユマのような奇人を受け入れるくらいだから、信仰や文化の差異によって人を廃絶するような険しさはオロ王国にはないのだろう。

ユマはオロ王国について、数々の文化が花火のように炸裂する地に栄える国であると予想した。案の定、東西の大陸のほとんど中間に位置するらしく、東大陸の西端がオロ王国の領土であるらしかった。

また、貨幣経済もそれなりに発達しているらしく、車を珍品奇物として売りに出せば中々の値で売れるのではないかとも思った。他にもユマが持ってきた毛布はアカアが大絶賛したほどで、残念なことに彼女がものの値打ちには無頓着なせいで、どれくらいの価値があるかは分からないが、今のユマにとって捨ててきた車に数多くの財産があったと言える。それを捨ててきた事実を猛烈に後悔しないのは、現在のユマがアカアによって保護されている安心感による。

ちなみに、今現在ユマの持つ財産は以下である。衣服は除く。

腕時計、銀色で無地のジッポライター、煙草二箱、絆創膏と消毒薬、胃薬、毛布、発炎筒、キーケース、手帳、ボールペン一本、携帯電話、ペットボトル、工具数種、ショルダーバッグ、携帯ティッシュ三つ、ハンカチ、手提げ鞄（かばん）、乾電池四つ。

発炎筒などは獣に襲われた時に焚こうと思い持ってきたものだが、キーケースや乾電池に至っては何の役にも立たない。ユマの面白いところは荒野のど真ん中に車を捨て置くとき、きちんと鍵を抜いて来たことだ。習慣が抜けきらないのか、それとも狼や野鼠が車上荒らしのような真似をするとでも考えたのか、当の本人にもよくわからない。

四日目に人里が見えた。ここまで来ると、人に踏みならされた平坦な地面が顔を見せ始め、この地方の人は焼畑をするのか、時々禿げた山も見えた。

藁葺（わらぶ）きの屋根が居並ぶ寂れた村で、険しい顔つきをした子供が牛を鞭打って畑を耕していた。

ユマはオロ王国の文明について期待が外れたと落胆したが、アカアの一言でどうにか持ち直した。

「ここは田舎です。王都まではあと十日ほどです……」
この日は村長らしき人の屋敷で泊まった。晩餐は粥の様なものを出されたが、アカアを接待するためか、牛の肉も出てきた。
（まさか畑を耕していた牛じゃないだろうな……）
家産を傾けるほどの接待には見えないが、村長が地に額をつけてアカアを歓待する様を見て、ユマは不思議な気分になった。
「先生、お酒はいかがですか？」
村長の懐具合が心配になってきたので、ユマは一度断った。すると、村長の目に怨の色が見えた。
（ははぁ、もっと金を落としてゆけということか。それとも、貴族が浮かぬ顔で帰ったとなれば、後に響くのか……）
アカアが村長に支払う対価は、牛一頭より遥かに勝るのだろう。村長がローファン伯の娘をもてなす労苦は、対価を得て自らを潤す楽しみでもあるようだ。
「いや、いただこう」
ユマがそう言うと、村長の表情が晴れた。
村長の娘らしき少女が酒を注いだ。甘ったるくて、不味い。とても酒とはいえない代物だった。それ以上に、村長の娘がひどい不細工だったことが、酒を楽しもうとする者にはこたえた。鼻が臍を曲げたように上を向いていて、両の目がやや離れている。他の部分は目だって崩れてはいないが、その二つの要素が強烈に彼女を形作っていた。

風呂もあった。ユマの期待は外れて蒸風呂だったが、旅の垢を落としながら自分が生まれ変わったような気持ちになった。三日目あたりから頭が、昨日からは体の所々が痒くなっていたから、ユマはそれも含めて入念に体を洗った。勿論、石鹸など無く、軽石でこするのだ。
突然、娘が入ってきた。さもありなん――と思ったユマだったが、黙って彼女の思うがままにさせた。石で垢を擦るのが上手で、思わ

ず寝息を立てそうになった。
（不細工だが、中々悪くない）
勿論、閨（ねや）を共にするのだけはお断りしたいが。
「お着替えをここにおいておきます」
村長の娘が言ったところで、ユマははっと我に返った。
「俺の服は、捨てたり、洗ったりしないでくれ」
少女たちが、川辺で石を打ちつけて洗濯を行っていた光景を思い出して、ユマはひやりとした。あんな手荒い真似をされてはスーツがずたずたになってしまう。
娘がいぶかったので、ユマは答えに窮し、適当なことを言った。
「正しいやり方で洗わないと、呪（まじな）いが解けてしまうんだ」
「まあ！」
驚いた娘はまるで天衣を授かったかのように仰々しい仕草で、スーツをたたみ、奥へと消えていった。ユマは代わりに黒服たちと同じ服を着せられた。
一室をあてがわれて寝ようとすると、村長の娘がついて入ってきたが、
「眠い」
といって退けた。娘は静かに泣きながら村長の元へと帰った。
（それに病気をうつされそうだ）
何の根拠もなく失礼きわまりないことを考えたユマだったが、見知らぬ土地に放り出される前の暮らしが病的に清潔であったことを考えれば、彼が田舎娘に偏見を持ったとしても責められないだろう。
村長のため息が耳元で聞こえてきそうだったが、十分に稼がせてやったと思ったユマは、疲れが溜まっていたのか、泥のように眠った。

第一章「原初の声」（6）

明くる日の朝、集団の人数が増えていた。どうやらアカアが奴隷を二人買ったらしい。虚ろな目で大きな荷を背負う彼らを見たとき、ユマは薄ら寒い何かを感じた。

村を発つと、険しい山登りを強いられた。斜面を馬車で進むのはこんなにも無謀なのかと思うほどに重労働で、馬車を押していた奴隷が倒れて足を轢かれた。

「何ちゅう光景だ……」

奴隷は足の骨を折ったのか、呻き声を上げながら苦しんでいる。ユマはアカアと同乗していたが、奴隷を見たアカアがこともなげに凄まじいことを言ったので戦慄した。

「歩けそう？」

と、アカアが黒服を統べる男に訊くと、男はかぶりを振った。

「そう、では置いてゆきましょう」

ユマは最初、彼女の台詞を理解できなかった。まさかとは思うが、反芻してみても信じられない。

「置いていくのか。山道のど真ん中で？」

ユマの口からこぼれる様に吐かれた台詞に、アカアは首を傾げた。

――それが何か？

と言いたげである。

（やっぱり螺子が一本抜けてんじゃないのか。この女は……）

眼下では黒服の長が配下に指図をしていた。

「一日分の水と食料をここに置いてゆく。旅人に助けを請えば無事に山も下りられよう」

まるでそれが最大限の厚意であるような口調だった。奴隷の表情は見る見る青ざめ、共に買われた奴隷が仲間の助命を懇願するために、黒服の長の足にしがみついた。

「それはあんまりです。このままでは山を下りる前に山犬に襲われ

て死んでしまいます」
黒服の長が睨みつけると、奴隷はひるんだ様子だったが、同郷の者を守ろうとする意識が強いのだろう。震える声を振り絞った。
「せめて、共に下山させて下さい」
目を潤ませて懇願する奴隷だったが、強引に腕を振り払われて地に伏した。
「仕事もせぬ。役にも立たぬ。その上で主に命令するのか！」
鈍い音が聞こえた。一瞬、目を伏せたユマだったが、再び彼らを見ると、奴隷の一人が鼻から血を噴いてもがいてた。周囲には黒服の男たちの他にアカアが元から連れていた奴隷もおり、彼らはおびえたり、目をそむけたりしながら眼前の光景が早く過ぎ去ることを祈っているようにも見えた。
アカアはというと、もはや彼らのやり取りには興味がないらしく、
「先生、しばしお待ちくださいませ」
といって、退屈そうに本を開いた。
「――っ！」
ユマはアカアを突き放すように車外へ飛び出すと、黒服の長の肩をつかんだ。
「やめろ」
黒服の長は驚いたようにユマの顔を見た。だが、すぐに口元が緩んだ。
（俺はこいつになめられているのか？）
ユマは直感した。
「これはこれは、先生。見苦しいところをお見せしました」
黒服の長は大仰に言った。慇懃（いんぎん）な態度が腹立たしかったが、ユマは耐えた。
（この髭（ひげ）っ面（つら）の名前は何だったかな？）
と、アカアが黒服の長のことを何と呼んでいたかを思い出そうとした。
「ヌル？」

飛び出したユマを目で追ったアカアが、男の名を呼んだ。
（そう、ヌルだ。いかにも悪人っぽい名前しやがって……）
顎鬚のたくましい、長身の男だ。痩せているように見えるが、無駄な脂肪をすべてそぎ落とした様な強さが体貌から滲み出てくるようでもある。歳は三十の半ばあたりだろう。
目を見れば気圧されるのは分かっていたから、ユマはヌルの目を見ずに言った。
「こいつは金を出して雇ったんだろう？　雇い主なら最後まで面倒を見ろ」
ユマの口調に棘があったためか、ヌルは思わず反論した。
「雇ったのではない。買ったのだ！」
ヌルの言葉を聞き流したユマは、地に伏せた奴隷たちの前まで歩いてゆくと、屈んで顔を覗き込んだ。
（若い……）
どちらも十四、五の少年である。ユマは自分の腹の底で、何かが沸々と煮えてくるのを感じた。
「先生？」
アカアが幌をめくって車内から出てきた。
（あの世間知らずを説得したほうが早いか。いや、この髭に軽く見られると後が怖い）
ただでさえ素性の怪しい男がアカアの客として迎えられたのだ。この先、ユマが何かの失態をおかしてアカアから疑われた場合、ヌルという男は真っ先にユマを放逐するだろう。ここは是が非でもアカアに先生と呼ばれる者らしく振舞わねばならない。
「その子を馬車に乗せろ。俺が歩く」
ユマが奴隷少年を起こそうとすると、少年は驚いたような顔でユマを見た。
「何も先生がそんなことをなさらなくても……」
やはり、アカアには理解できていない――と、ユマが軽く失望を覚えたとき、今度はヌルがユマの肩に手をかけた。

――やめよ。
と、目で言っている。刺すような視線に敬意などは微塵も込められていなかったが、このことが逆にユマを挑戦的な気分にさせた。
このままでは少年は死ぬ。旅人が通るといっていたが、それも何日に一回の話だろう。もし、現れなければという想像をアカアはしないのか。それに旅人が彼らを助けるという保証もない。金目の物など持っていないから、追い剥ぎには遭わないだろうが。
ユマは誰を見るでもなく、声を張って言った。
「このままではこの子は死ぬ。それがわかっていながら、何故捨てて行くんだ？　さっきヌルは旅人に助けてもらえと言ったが、旅人が現れなければどうする」
ヌルに対して言ったようでもあるが、これはやはりアカアを非難する声だろう。それに気づいたのか、アカアは先生の不機嫌をなだめたいがために、ヌルの方を見た。彼はやれやれ、といった口調で言った。
「運がよければ、必ず助かる」
この言葉を聴いた瞬間、ユマの脳裏に、瞼に落ちてくるような蒼穹と、荒涼の大地が広がった。たった二晩だけであるが、ユマは闇の中ですすり泣く様な旅を行ったのだ。他の誰かが自分と似たような境遇に陥ることが、耐えられなかった。かわいそうなのではない。絶望的な状況から自分を救ってくれたアカアという少女が、実に酷薄な人であったことが、残念でならないのだ。九死に一生を得るという言葉があるが、ユマはアカアが現れたことで、十死ぬはずだった命を拾ったのだ。あの時の喜びに泥をかけられたような気分は、他の誰かと共有できるようなものではない。
（俺を助けたのに、この子は助けようとしない。いつか、俺も捨てられるかもしれない）
ユマが激昂した理由は義侠心によるものだったが、彼が行動したのは、実は己が身の危うさに気づいたからであるかもしれない。だから、ユマの憤りは嘆きにも似て、風が空吹いているような気分が

あった。
「運がよければ助かるというのは、ほとんど死ぬってことだ。つい昨日まで畑を耕して安穏に暮らしていた少年を、自分の都合で連れ出して、使えなくなったから捨てるっていうのはどういう了見だ？」
ヌルの胸倉をつかみそうな勢いだった。ヌルの目は冷ややかだったが、これにはアカアが焦った。
――斬ってもよろしいか？
と、ヌルが目で問うてきたからだ。今、ユマに死なれると退屈な旅の話し相手がいなくなってしまう。
「先生。わかりました。馬車に乗せましょう」
アカアがそう言った事で、場はおさまった。ヌルはすれ違いざまに、
「連れ出したのではない。買ったのだ……」
と、呟いた。ユマの怒りはまだおさまっていないが、これ以上ヌルと話をしたいとは思わなかった。
「大丈夫か？」
そういってユマは足を折った少年に手を差し伸べた。
「馬車に乗せる。手伝ってくれ。他に治療の出来る奴はいるか？」
とユマが言うと、二人が少年を抱えて馬車に運んだ。鼻血を出していた方の少年はどこからか棒切れを拾ってきて、車輪に轢かれた少年の足にそえ、軽い治療を行った。ユマはポケットから携帯ティッシュを取り出して少年の鼻を拭いてやり、足を折った方には消毒薬を持ってきて車輪に擦られた傷口を拭いた。二人は不思議そうな顔をし、辺りにいた者もそうであった。
「ありがとうございます」
一人は地に額を擦りつけ、もう一人は車上から会釈をしてユマに謝した。
「なに。困ったときはお互い様だ」
月並みな台詞を吐いたユマだが、悪い気はしなかった。

この後、集団におけるユマを見る目が変わった。
奴隷たちから見られるとき、敬意にも似た清々(すがすが)しい何かを感じるようになった。逆に、黒服の男たちからは一層毛嫌いされたようだ。とはいえ、彼らの全てがヌルと同調している様子でもなく、ヌルより年配の男は食事時にユマの傍に寄ってきて、話しかけてきたりした。
「貴族のお嬢様をしかりつけるとは、あんたは本当に仙人なのか？」
水筒を片手に干し肉を齧(かじ)りながら聞いてくる。どうやら、黒服たちの間ではユマはそのように見られているらしい。
「災難に遭って他人に助けを請う人は、他人が災難に遭ったときに助けをよこすとは限らない。どうしてだろうな？」
まるで自分に問いかけるような言葉だった。自らの正しさをほのかに主張してもいる。
鼻血を噴いた方の少年は、誰に命じられるわけでもなくユマの世話をするようになった。アカアはこれにも無頓着だったが、時々幌をめくっては、奴隷少年と共に歩くユマを見下ろした。
少年の名はリュウといった。ぼさぼさの髪に土色の衣を着ている。目が大きく、一種の愛らしさがある。もう一人はホウと言い、リュウより背が高く、目が細い。
「竜か。強そうな名だ……」
ユマがそう言った時、少年の目が輝いた。
「俺の故郷ではそういう意味を持つんだ」
おそらくユマがリュウという音に竜を想起したがために、源精が竜という言葉を少年に伝えたのだろう。後でアカアに訊いたところ、どうやら竜は存在するらしい。滅多に人前に現れず、巨大な力を持つという。ユマの脳内で描かれる竜の像とあまり変わりがないように思えた。
「先生の故郷では、ホウはどのような意味でしょうか？」
リュウがついでに友人の名のことを問うた。
「鳳(ほう)は王者の鳥だ。つがいで、凰(おう)という鳥とあわせて呼ぶことが多

い」
足が痛むのか、ホウは苦しそうな顔をしていたが、一瞬だけ口元が緩んだ。
多少なりともつまらぬ知識を仕入れておくものだと、ユマは自分に対して感心したが、車上からそれを見ていたアカアがユマを招きよせ、
「わたくしは何という意味ですの？」
と聞いてきたために、先の争いのことなど頭からすっ飛んでしまった。
「さあ、どうだろう……」
ユマは山間から眩しくもれてくる夕光に気づくと、指でアカアの視線を誘うようにして言った。
「……赤いという意味じゃあ、駄目かな？」
そう言われたアカアは少しの間、感じいったように夕空を見ていたが、何を考えたのか、今度は近くを歩いていたヌルの方を指差して、
「彼は？」
と、小さな声で言った。
ユマは一瞬嫌な顔をしたが、アカアに当たるのも理不尽だろうと思い、表情を戻した。
「よくわからない」
「そうですか……」
アカアが少しだけ残念そうな顔をするので、ユマは付け足した。
「いや、『よくわからない』という意味だ」
少女の口から小さな笑みが漏れた。無骨で普段何を考えているかわからないヌルだから、アカアもおかしみを感じたのだろう。
ヌルは一部始終を見ていたらしく、軽く舌打つと、険しい顔つきで黙々と歩き続けた。

第一章「原初の声」（7）

道中、雨に遭ったために予定より少々遅れての下山となった。
下山してからは石畳で舗装された道路が目に付き、車上の旅は快適になった。もっとも、ユマが乗るはずの荷馬車は負傷したホウが占領しているから、ユマは歩いての旅になる。
一行が歩を進めるのは早朝から日が暮れるまでの間に過ぎない。それでも歩きなれないユマには辛く、靴擦れと血豆が何度も潰れてほとんど歩けなくなった。アカアに呼ばれる場合も多いから、実際にユマが歩く時間は日に四時間程度だが、それでも三日目には苦痛と疲労で顔面が蒼白になり、共に歩くリュウを慌てさせた。
足が棒になるというが、悪路を歩いている間は棒になった足が磨り減るような、あるいは砕けるような感覚しかなく、いくつかの街や村を通り過ぎてもユマの目には何も映らなくなった。
「旅をされたことはないのですか？」
アカアはユマの軟弱さをあざ笑うわけでもなく、ただ、下々の者が出来ることを術士であるユマがこなせないのが不思議で仕方がないらしい。
「俺の故郷では、遠出をするのにわざわざ歩く奴なんていなかった」
ユマはつい、本音を漏らした。
「馬車にお乗りになるんですか？」
アカアは少し驚いた後に、何かを理解したような顔をした。なるほど言動は少々雑なところがあるものの、ユマの持つ知識は明らかに異質であり、更には姓を持っているということはどこかの地の豪族である可能性が高く、確証はないものの、これらの想像はアカアを楽しませるには十分だった。
「馬車がこんなにうるさい乗り物だとは思わなかった」
ただ蹄（ひづめ）の音と馬が鳴く分だけうるさいと思っていたが、車輪や車体が衝撃を吸収するような構造を持っておらず、激しく揺れた。そ

れに、日中でもカーテンを閉めてしまえば車内は暗く、とても乗れたものではない。
「今まで酔わなかったのが不思議なくらいだ」
気分が悪くなればアカアに断って歩いた。光るような風が気持ちよかったのは最初だけで、次第に足が潰れるような激痛との格闘になる。
「初めて馬車にお乗りになりましたの？」
「ああ、車があればよかったのにな……」
ユマはアカアと会話をしているが、人の話を聞かない性格もあいまって、一人ごちるような口調になった。アカアの目が鋭くなったことに、気づくわけもない。
（こういう時、先生は面白い話をしてくださる）
数日の付き合いではあるが、アカアはユマの人格の面白さに気づいてきた。
「牛車ですの？　それとも犬とか。まさか……竜？」
「違う。違う。あんな（竜は知らないけど）鈍いのと一緒にするな。燃料で動く車だ」
アカアが理解できなそうな顔をしたので、ユマは自動車について簡単に説明した。
「先生は火術を扱われますの？」
アカアは驚きを込めて言った。
「そうじゃない。あれは機械だ」
話が弾んで、次第に電車や飛行機の話になった。アカアは半信半疑の上にほとんど理解できないようだったが、最後にユマが言った言葉を聞いて、瞠目した。
「乗り捨ててくるんじゃあ、なかったな……」
馬車が一瞬だけ浮いたような感覚がした。車輪が小石を踏んだらしい。
「あるのですか。その……自動車というのが？」
「あるよ。君と会ったところから少し離れた場所に置いてきた」

「野ざらしですか？」
「砂が少し気になるが、一月も放っておかなければ、まあ大丈夫だろう。完全に壊れたわけじゃあないだろうし」
アカアの目が爛々（らんらん）と輝いた。
――戻りましょう！
と、いいかねない顔つきだったが、どうやらすんでで飲み込んだらしく、
「取りに行けるように、父上に相談してみます」
と言った。

アカアと出会ってから八日目に広い盆地に出た。途中でユマが熱を出したため、立ち寄った街に二日ほど滞在した。
（便所とベッドがあるのがこんなに有難いと思ったのは初めてだ……）
道中、用を足す時も集団から離れすぎないように気をつけねばならず、たとえ離れたとしても、見晴らしのよい平野でしゃがみ込んでいる姿が丸見えなのは羞恥の極みだった。アカアはどうしているのか、そのような姿を一度も見かけなかったが、侍女が朝方に小型の甕（かめ）を馬車から持ち出すのをみて納得した。
（なるほど、道理で香を焚くわけだ……）
ユマは甕に跨っているアカアを想像して――下卑た想像だが――小さく嗤うと同時に、妙なところで感心した。さらに単純な興味と切実さもあいまって、
（みんなどうやって拭いてるんだろう？）
という、子供じみた疑問をアカアの前で口に出しそうになったことがある。後でさりげなくリュウに聞くと、
「その辺に落ちてる石や葉っぱですが……」
と、当然のように答えられたので閉口した。ユマが体調を崩したのは、やはり野宿が原因だろう。
熱を出したユマはアカアの厚意がうれしかったが、ヌルにますま

す軽く見られるようになった自分に嫌悪を感じている。
（どこもさびれた街だ……）
千人程度が暮らしているに過ぎない、小さな集落に着いた。
聞くところによると、ここはそれなりに賑わっているらしい。その証拠にリュウは目を輝かせながら街を見てまわり、逆にホウは萎縮している感じだった。行商人が小さな天幕を張って地方から仕入れた品を開いている。さすがに街の中央を突っ切る路地は人で埋め尽くされて馬車も通れない感じだったが、それでもユマの目を圧倒するほどの厚みはない。
陳列された品々も、確かにユマの目には奇妙に映るものが多かったが、光沢や清潔感に欠けていて、どれも埃をかぶっているようにしか見えない。
（田舎者ではないらしい……）
露天に並ぶ品々には目もくれず、人ごみを無表情に見下ろすユマを、ヌルはじっと観察していた。アカアの護衛が彼の任務である以上、ユマという人間を見定めなければならない。
「退屈か？」
珍しく自分に話しかけてきたヌルを見て、ユマは少し驚いたようだったが、あえて感情を殺した声で答えた。
「そうでもない。王都はここより大きいのか？」
「無論」
「そうか。王都の人口はどれくらいだ？」
「詳しくは知らないが、二、三十万はいるはずだ……」
ヌルは言葉を濁した。ユマの質問はどこか的が外れているような気がする。
（まあまあだな）
百万都市に住んでいたユマの中では、数十万と言う人口を大都市と言い切ってしまうには少し寂しい。もっとも、王国の規模がどの程度なのかすら知らない以上、感覚としてそう捉えたに過ぎない。
「市にあまり興味がないようだが」

「無くもない。ほら、あれだ……」
ユマが指差したのは、家屋の屋根や天幕に飾られている紋章だ。
波を意識したようなうねりの中で一人の女性が鎮座している。
――あれは何かな？
とまでは言わずに、ヌルの言葉を待った。
「精泉（せいせん）の紋のことか？」
「精霊の泉なのか？　泉の精霊ではなく？」
「何を言っている。泉に精霊などいるわけなかろう」
ユマにしてみればヌルの言ったことは理解できなかったが、この男と会話を続けることに抵抗を感じたのですぐに切り上げた。

「ええ、確かに精泉の紋ですが……ご存知ありません？」
と、街を出発した後にアカアに問うても同じような反応をされた。
「知らないな。俺、異国人だし。神なのか？」
最初こそアカアを警戒したユマだったが、この頃は忌憚（きたん）なく彼女に問うようになった。
「違います。王都の一角に精霊が湧くといわれる泉があります。今は水ばかりが湧いていますが。上古、泉を訪れた旅人に光の精霊が宿り、王者となったという伝説があります」
「それがオロ王か……」
「そうです。オロとは光と同義です。今でも王のことを光王（こうおう）と呼びます」
アカアの話によると、オロ王家の初代は女性だったようで、紋章は初代光王が光精に祝福される様を描いているらしい。ここまでは理解したユマだったが、ヌルとの会話を思い出し、重ねてアカアに問うた。
「光の精霊は泉の精霊とは違うのか？」
「泉の精霊……とはいかようなものでしょう？」
「そうだな。俺の故郷では（といっても故郷からもちょっと遠いが）泉を訪れた者を試し、答えを得たものを祝福するといったところか

な。ある日、正直な樵(きこり)が誤って泉に斧を落とした……」
　といって、ユマは自分の知る物語をアカアに話した。
「それは精霊ではなく、妖怪です。精霊が人を試すだなんて聞いたことがありませんわ」
　アカアが笑うのをみて、ユマは彼女のいう精霊というのが、意思を持たない現象であるような気がした。風が吹く、火が燃えるといった現象は精霊と呼べるが、悪人に雷を落としたり、たたりをおこしたりするものを精霊とは呼ばないらしい。
（精霊だの術だのと言っているが、この世界も中々に醒(さ)めてる）
　迷信に支配されていないという醒めがある。科学とは違った方向に人類が進化し、このような世界ができあがったのか。ユマにとってアカアを含めるオロ王国の住民は、奴隷制度をはじめとしてまるで未開であり、古風にも見えたが、その考えを改めるべきかもしれない。
「それに――」
　アカアの話が続いていたことをすっかり忘れていたユマは、驚いたように彼女の顔を見た。
「水に宿る精霊はありません」
　これについては何故かを問うても無駄だった。水に干渉する精霊はいないというのが、アカアの持つ常識のようだ。

第一章「原初の声」（8）

王都に至ったのは、ユマが突然荒野に放り出された日から数えて十八日目である。アカアの予定より二日遅れての到着となった。

広々とした平野の中で、蒼穹を貫くような高い宮殿が見えた。なるほど、オロ王国は小国ではないと思わせるような堅固な城門が見え、その外側に城下町が並ぶ。道中で立ち寄った町々はまず城壁があり、その中に人が住んでいたが、王都は夥しいほどに犇く人を収容しきれないのか、宮殿の外に街があり、その外にまた村々があり、その外に田園地帯が広がっている。まるでいくつもの都市が歩いて王都の傍に腰を下ろしたかのようでもある。

この巨大な都市の名を――

「リヴォン」

という。

（ははぁ、リボンか……）

ユマは丘の上から王都を見下ろした時、妙なおかしみを感じた。

遠望すると王都の北は山脈が腰を下ろしており、西に流れる大河がうねり、王都の南方を守護している。ユマの歩いてきた東には広大な平野が広がっている。天嶮に包まれたこの都市は、北側に宮殿があり、それに結ばれるようにして東西に大きな城下町がある。上空から見下ろせば、結んだリボンのようにも見えるだろう。

更に、遠くに見える河の色だ。深い紅色をしている。

「紅河です。上流に八本の支流があり、八尾ともよばれています」

気味悪そうに河を遠望するユマを見て、アカアが言った。

「渡来人にはちょっとばかり不吉だな……」

アカアが首を傾げたが、ユマは顔をしかめたままでこれ以上言葉を発しなかった。

さて、王都である。

東西に展開した城下町はいかにもといった風情で、ユマが足を踏み入れた東の城下町は活気に満ちていた。東西の町にはそれぞれ名があって、西を「リ」、東を「ヴォン」をいうらしい。オロ王国には一時期を除いて遷都の歴史はないから、これら二つの集落が王国の出発点であったのかもしれない。

繁華街らしき場所も遠望できるが、筋金入りのお嬢様であるアカアがそんな場所に足を踏み入れるはずもなく、ユマは丁寧に舗装された石畳の道路に感心しながら、過ぎ行く建物や人々を観察していた。煉瓦（れんが）で固めた五階建ての集合住宅のようなものも見えるが、瓦葺（らぶき）の東洋風な建物もあった。

「やっぱり奴隷がいるな……」

地域だけの古びた習慣であればと淡い期待を持っていたが、どうやらそのようなはずもなく、ユマは酷使される奴隷を見るたびに不愉快な気分になった。

「秘書奴隷というものもいます」

憮然（ぶぜん）となったユマを見たアカアが、何も奴隷の仕事が肉体労働に限らないことを示唆したが、

「彼らには自由がないんだろう？　それじゃあ、奴隷に変わりない」

と、一蹴された。

「明日、王都を案内してさしあげますわ……」

アカアにそう言われたこともあって、ユマは熱心に観察することをやめた。旅疲れがそうさせるのだろうが、彼が窓の外を見ていた姿を驚いたように見上げていた奴隷がいたことに気づかなかった。

いつの間にやらローファン伯の屋敷に着いたようだ。日も暮れ、ヴォン北部の高台にあるその場所は静かな空気の中で豪奢な光を放っているようにも見えた。

（思ったほど大きくないな……）

と思ったのは屋敷の大きさに対してで、敷地自体は相当に広い。左右対称に作られた白壁の美しい建物で、中におびただしい数の燭（しょく）

台を想像してしまうように、窓から光が漏れている。
訪問客を威圧するかのような鉄製の門で、ユマは馬車を降ろされた。車上姿で敷地内に入ったのはアカアただ一人である。
馬車を追って歩いてゆくと、使用人らしき人々が屋敷の前で整列している。
「おや、メイドがいるじゃないか」
と、傍らで歩くリュウに話しかけたが、田舎から出てきたばかりの彼の耳には届いていないようだった。
黒地の衣服はヌルを髣髴(ほうふつ)させるが、彼のように運動に優れたつくりではなく、下部はスカート状になっている。その上に白のシャツを着ていて、服が緩まないように引き絞っているようだ。頭にはカチューシャのようなものをつけていて、人によって白や黒と色が違う。ユマの目にとまったのは女性の格好だが、男に関しても下がズボン状のものを穿いているだけであまり変わらない。
彼らとは全く違う、黄色をベースにした緩やかな衣服に身を包んだ女性がいる。少々肉つきがよく、小太りと言ってよいが、温和な空気が体貌にあらわれている。髪は後ろに団子に纏めていて、やはり赤い。
「お母様！」
アカアは馬車から飛び降りるようにして、母に走り寄った。
「アカア、健やかで何よりです。ですが、馬車から飛び降りるのはおやめなさい」
声がやわらかい。母にたしなめられたアカアは小さく畏(かしこ)まると、母の目を盗んでユマの方を見、舌を出した。
「そちらの方が？」
アカアから既に使いを出していたのか、ユマの存在は既に母の知るところだったようだ。
「術士のユマ先生です」
予想通りの紹介をされたユマは、ローファン伯爵夫人に軽く会釈をした。ユマが簡素な挨拶を行っただけなのを見て、彼女は少し驚

いたようだった。
（跪くべきだったかな？）
だが、ここで慌てて慇懃な態度をとっても侮られるだけだろう。
「先生はどちらのご出身ですか？」
「東京です。ちなみに私は術士ではなく、学者です」
術士などという虚妄は、すぐにはがれる。そう思ったユマは、ここで自分に対する誤った印象を拭い去ることにした。学者と自称したのは自分がこの世界の人間があずかり知らぬ思想を持っているからという淡い自負からだった。ただ、ユマの持つ知識は小説や劇画から荒く学んだ半端なもので、それが異文化から見れば有益ではないことには気づいている。しかし彼の持つ財産は――例えばアカアがユマの毛布を絶賛したように、ある程度はオロ王国の文化と折り合いをつけることができるという予測がある。早い話が、とりたてて手に職もないユマが異文化の中で生きていくには舌先三寸を駆使する以外に道がないのだ。
「トオキョオ……聞きなれない名ですね」
「当然です。地の果てより遠い……」
これにはアカアが助け舟を出した。勿論、ユマを助けるつもりなどもなく、彼女はユマと話すうちに導き出した自論を披露したかっただけのようだ。
「古典にある、『十の太陽が昇る都』ではないでしょうか。いくつもの海を越えた東の果てにそのような地があると読んだことがあります。先生にお話したところ、先生の故郷では古くは十の太陽があったという伝説があるとのことです」
アカアは得意満面だったが、十の太陽が同時に昇るという伝説はユマの故郷にはない（あるかもしれないが少なくともユマは知らない）。ただ古代の大陸人が太陽を十種に分け、それぞれに名をつけていたことをユマはどこかで読んだ記憶がある。
――そのような遠方から何のために？
伯爵夫人の目がそう問うている。

「西方のことを知るべく、旅をしておられるとのことで、しかし道中、自動車が故障し、立ち往生されていたところを私が通りかかったのです」

この後、アカアが自動車について力説したために、妙に長い立ち話となった。伯爵夫人もこれには興味を示し、すぐに回収に当たらせることを約束した。

ようやく、ユマは屋敷に入ることが出来た。

（会話の手ごたえ次第では俺を追い出すつもりだったらしい……）

アカアの客人であれば食事時にでも問えば済む話だろう。それをわざわざ邸宅の前で行ったところに、伯爵夫人のユマに対する警戒感があったことは確かだ。伯爵夫人本人がユマとの会話を行ったことから、アカアが自分に対して好意的に解釈した情報を夫人に与えたことは間違いない。彼女を警戒させる何かは、これはユマの直感だがヌルが吹き込んだものかもしれない。

――あの者は他国の間者かもしれませぬぞ。

くらいのことは言ったかもしれない。だが、同時にヌルはユマがあまりにも旅慣れていないことに疑問を持っただろう。それから導き出される答えは一つしかない。

「車か……」

乗り物と言えば馬車しか知らない人々を驚愕させるには十分だろう。

（車が見つかれば、とりあえずは安泰かな……）

ユマはそう楽観した。

後で知らされたが、どうやらローファン伯は留守のようで、自分の安全を確保するにあたって最大の難関をひとまずは回避することが出来た。ローファン伯がどのような人間か、ユマは知らない。アカアの人物評はあてにならず、だが伯爵位についている以上、愚鈍でもあるまい。彼が異邦人に対して寛容であるかどうかは、使用人には聞けない。嗅ぎ回っているという事実がマイナスに働くことを恐れたのだから、ユマの臆病さはどこか的を外していて滑稽ですら

ある。

「車は重い。馬車の三倍は考えたほうが良いですよ」

食事に招かれたユマは、伯爵夫人に忠告した。ユマが車を乗り捨てた場所は他の領主の支配下であるようで、伯爵夫人がそれを警戒したからだ。

「それに、鍵がなければ動かない」

ユマはキーケースから出した鍵を見せびらかした。ちなみにユマは伯爵夫人が人をやったとしても車を回収できないと思っている。何より故障している上に燃料の問題で後数キロ走ればがらくたとなることと、視覚的な印象を与えるだけでよいと思ったからだ。

「それが鍵なのですか？　装飾だとばかり思ってました」

自分の知らないことがまだあったことに対して、アカアが恨めしそうに言った。

ユマは長方形に近い円卓の端の席についている。逆端に伯爵夫人が座り、横向かいにアカアがいる。それなりに声を張らなければ会話にならない。

ユマが閉口したのは、二人とも素手で食事を行っていることだった。

（そりゃあ、西洋では結構な時代まで素手で食っていたような話を聞くが……）

箸もなく、それを必要とする料理もない。羹（あつもの）ばかりはレンゲのような底の深いスプーンですくうことが出来るが、他が壊滅的に不慣れだ。左横でメイドが手洗い用の水を汲んだボールを持っているが、ユマは肉切れを一つ口に運ぶごとに、神経質に手を洗った。メイドはよく教育されているようで、不満を顔に出すようなことはなかった。

メイドの美しさはアカアには劣るが、目元にアカアには無い強さが見える。自我の強さである。誇り高いというわけでもなく、職務を忠実に行うというまっすぐな気持ちがあらわれている。背は少し

高く、髪は黒い。体を引き締めるような衣服が、彼女の体が引き締まってしかも豊かであることを強調している。
（こいつを伽（とぎ）につけられたら抱いてしまいそうだ……）
と、ユマはメイドの顔をしげしげと眺めながら思った。メイドはユマの視線に気づくと、ユマにしかわからないような微かなはにかみを見せてから、目を伏せた。
例のごとく、蒸風呂に入ったとき、同じメイドがユマの垢を擦りに来た。
「リンと申します。至らぬところがございましたら、何なりとお言いつけ下さいませ」
垢を擦られて良い気分に浸りながら、ユマはふと、今の自分が奇跡的に生き残っているに過ぎないことを思い出した。
（あの時、アカアと出会っていなければ……）
この後、ユマはあらゆる場面で同じ台詞を心中で吐くことになる。それが自分にとって足かせになるとは知らずに。
――ローファン伯はどういう人かな？
喉まででかかった言葉を、ユマは飲み込んだ。使用人が主人を批評するわけがない。
「君も車を見たいのかな？」
あえて違う話題を切り出した。
「はい、馬もなしに自力で走る車というものには興味がございます」
「乗ってみたいか？」
「いいえ、わたくしなどは……」
「そうか……」
この言葉を最後にユマが黙ってしまったので、リンは彼が機嫌を損ねてしまったのかと不安になったが、少しすると寝息が聞こえてきたので、胸を撫で下ろした。
寝ぼけ眼のまま、寝室へとたどり着いたユマだったが、アカアと出会った幸運がこの日の内についえていたことには気づかなかった。

一章「原初の声」了

二章「闘士衝冠（とうししょうかん）」へ続く

第二章「闘士衝冠」（1）（前書き）

■一章までの主な登場人物

・ユマ
本編の主人公。本名は湯山翔（ゆまかける）。ある日突然、異世界に飛ばされる。荒野を流浪するも、伯爵の娘アカアに保護される。

・アカア
ローファン伯の娘。王都に帰還する折に、偶然、遭難状態のユマと出会う。好奇心からユマを先生と呼び、旅の一行に加える。

・ヌル
アカアの護衛。奴隷の扱いを巡ってユマと反目する。

・リュウ
アカアが道中に立ち寄った村で、山越えのために買い取った少年奴隷。
負傷した奴隷を見捨てようとしたアカアを強諫したユマに感銘を受ける。

・ホウ
リュウの友人で、馬車に轢かれて負傷した際に置き去りにされそうになるも、ユマによって救われる。

・ローファン伯爵夫人
アカアの母。ユマが所有している自動車に興味を持つ。

・リン
ローファン伯爵夫人がユマにつけた使用人。

第二章「闘士衝冠」（1）

夢を見た。
気づけばユマは馬車に乗っていた。黄色い大地の上に打ち込まれた細い石畳の道を、馬車が音を立てて走っている。
速度はそれほど速くない。馬車の横を、数人の下僕が小走りでついてゆく。
「もう少し、速度を上げましょう」
御者台で鞭を振るう少年がそう言った。よく見るとリュウである。
「いや、ゆっくり行こう」
下僕の一人が肩で呼吸しているのを見て、ユマは言った。そこの丘で休息しよう――と、付け加えた。
丘に着くと、古びた小屋があった。いつの間に降り始めたのか、雨を避けるために、ユマは小屋を借りることにした。
小屋の前に、守衛らしき男が立っている。服装から見ると、ただの掃除夫のようでもある。
「雨宿りがしたいのだが……」
リュウがそう言うと、男は小さく会釈をした。銅貨を与えるときに小さく足を引きずっていたので、ユマは「足が悪いのか？」と、声をかけた。
が、彼は言葉を発しなかった。
いぶかったユマは馬車を下りた際に男の顔を見た。
父だった。
（何故、こんなところに……）
そう思うのもつかの間、男はユマの前にひれ伏し、
「最近、息子を亡くしまして……貴族様のご厚情は大変痛み入ります。粗末な小屋ですが、ご自由にお使い下さいませ」
と言った。
ユマは言葉に詰まった。同時に、息子が行方不明になった両親は

今頃どうしているのかと思いを馳せたところで、彼は夢を見ている自分に気づいた。
「ああ……」
ため息をついたところで、夢から醒めてゆく物寂しさが全身を駆け巡った。
首を垂れたためか、頭に付けていた冠が落ちた。
主人が落とした冠を這うように拾った下僕がいた。
ユマは醒めつつある夢がまだ続いていることを不思議に感じたが、下僕の顔が自分と全く同じであることに気づくと、心中で小さく呻(うめ)いた。
「うぅ……」
それが声となって外界に放たれると同時に、ユマは若い女の声を聞いた。

「先生?」
気づけばリンの顔が目の前にあった。ユマが安堵を覚えたということは、今しがた自分が見ていた夢は、悪夢だったのだろう。恐怖を伴う類のそれではなく、喪失感だけが残る夢だった。
「魘(うな)されていました」
よほど酷い顔をしていたのだろう。リンはユマの機嫌を伺うように言った。
「親父の夢を見た」
リンに言ってもどうしようもないことだが、ユマは罪悪にも似た感情に耐えられなかったのか、ついこぼしてしまった。
「まあ、御尊父ですか?」
「ああ、まだ足を引きずっていたよ」
ユマは切り捨てるような声で言った。だが口調とは裏腹に、口から出た言葉は他人の同情を誘っているようでもある。寝ぼけながらも、本人はそれに気づいたのか、リンが口を開こうとするのを目で制した。

思わず威圧感のあるユマに接して驚いたリンだったが、学者には偏屈な人間が多いと思っているためか、それとも先生は寝起きが悪い方なのだと解釈したためか、朝食の準備を済ませた頃には先の話題はおくびにも出さなかった。

どうやらこの家での朝食は寝台の前でとるらしい。

洗面器に汲まれた水で顔を洗ったユマは、

「今、何時かな？」

と、訊いた。ただの癖で、他意はない。

「もうすぐ八時です。王都見物は十時からの御予定です」

即答されたユマは彼女がどうやって時刻を知ったのか、興味がわいた。

「時計でもあるのか？」

「はい。ございます」

そう言って、リンは窓の外を指差した。

ユマが視線で追った先には、庭に打ち込まれた長い棒があった。

「日時計か。夜や曇りの日はどうするんだ？」

「一時間ごとに精霊台が鐘を鳴らしますし、水時計もございます。昨夜、お食事の席にも……」

「ああ、いいよ。どうやら寝ぼけていたらしい」

異文化であるが故に、奇抜な時計を期待したユマだったが、あてが外れた。後で腕時計と合わせて測ってみたが、ここでの一時間はどうやらユマの知る一時間と変わらないらしく、リンの言うところでは一日が二十四時間、一年が三百六十五と四分の一日であることまで同じらしい。ちなみに、今のオロ王国の季節は初夏である。

（まるで地球と同じだ……）

と、ユマの中でそれ以上に発展しようの無い結論が出た。

朝食が済むと、着替えをさせられた。勿論、昨夜の内に旅装は解いてあり、既にリンの用意した衣服に袖を通しているが、今回はそれに冠が増えた。ちなみに「させられた」というのは、リンによっ

て着せられたという意味だ。ユマが戸惑ったのは言うまでもないが、例によって卑賤な者であると侮られるわけにはいかないユマは、リンのなすがまま、新しい衣服に着替えた。白をベースにした服はシャツに近い形をしていて、生地が少し硬い。動きにくいというわけではなく、外見ほどに厚くない。シャツの上から羽織るベストはアカアと同じ青色で、これがこの家の好む色らしい。ただ、皮製の靴ばかりは底が薄く、ユマは屋内にも関わらず、地面の硬さを改めて思い知る羽目になった。

冠についてだが、環状になっていて、前が幅広で後ろが薄い。頭の上にちょこんと乗せる類のものらしい。左側に銀製の止め具があって、羽がついている。色はやや青い。子供用の帽子を頭にのせているような心地がして、落ち着かない。

ユマは嫌な顔をした。冠が彼の趣味に合わないこともあったが、それ以上に夢に出てきたものと全く同じであったことが彼を不気味がらせた。

「いかがなさいました」

「これをつけないとダメ？」

「五位冠（ごいかん）が御気に召しませんか？」

リンがあまりにも意外そうに言うので、ユマはかえって断り辛くなった。五位冠というのは、上から数えて五位という意味だろう。冠にいくつ位があるかわからないが、王侯を一、二位と考えても、悪くない階位に思える。道中、アカアに聞いた高位の爵は、公、侯、伯、子、男の五つはあり、他にも騎士に似たような階位が十はあったようだから、ユマがこれ以上に良い冠を被りたいと言えば、さすがのリンも表情を変えるかもしれない。

だが、

――ゴイカンでいいから、他のは無いかな？

などとは、もう言わなかった。考える途中で煩わ（わずら）しくなったのだ。

ユマは五位冠で満足したが、遠まわしにアカアに訊いたところ、先の五爵は三位冠までをつけ、十士爵と呼ばれる騎士にも似た階級

が四位冠であり、五位冠は庶民で裕福な者――豪商などがつけるものらしい。それを知ったユマは伯爵夫人に自分が試されていたと思って憮然となった。だが、遠国から来た者がオロ王国の風習に慣れないのは当然であり、やはり庶民同然の者に冠を与えたところに伯爵夫人――もしくはアカアの好意があったと思い直した。

ユマが五位冠をつけることに関して逡巡したことを、リンがアカアに告げると、彼女は興奮した顔つきで、

「やはり、あの御方は貴族かもしれないわ……」

と、はしゃいだ。彼女は五位冠についてユマが自分に問うたという事実を、

――下賤なものと一緒にされたか。

という矜持（きょうじ）として捉えた。それでも上位の冠を与えようとしないのは、ユマを侮っているからではなく、実際に爵位を得なければ四位以上の冠をつける資格が無いからだ。

四人乗りの馬車に乗って、ユマは王都観光に出かけた。同乗するのは、アカアとリンだ。まずはヴォンの街をみてまわることになった。

（嫁入り前の娘に、よく俺をつけたな……）

と、ユマは心中で苦笑いをした。それだけの信用が自分にあるはずもなく、ユマとアカアとの間で過ちが起こるのは、それほどありえないことなのだろう。あの伯爵夫人も想像だにしないに違いない。

馬車の横を走る人影がある。護衛のヌルとその配下だ。ユマはリュウにも王都を見せようと思ったが、ホウが屋敷でひとりきりになることはさぞ辛かろうと思いなおした。

「あれが精霊台。あれが大学。あれが……」

と、アカアが早口で説明するが、建物を遠望しながらでは理解しにくい。そのうちに彼女のうんちくに飽き、ユマは路上の人々を見下ろした。

頭に布（きれ）を巻いた人々は、露天商によく見受けられる。ゆったりと

した白衣を着て、数人で歩いている若者は学生らしく、精霊台で術を習ったり、大学で学問に励んだりするようだ。他に、金縁の硬そうな衣服で、ぴしりと容姿を正して歩いているのは、貴族のようであり、それ以前に彼らは必ず近侍や馬車と共にあるからわかりやすい。ヴォンの中でも王宮に近い高台に彼らの姿は多く、郊外へと近づくにつれて少なくなっていった。

他の男どもは、基本的に屋敷の使用人の服を崩したような格好をしていて、明らかにそれとは異なる人々は異国人らしい。

女たちはというと、ほとんどは男と変わらず、腰元だけ引き締めた着物のような衣服を着る者が多い。若い女のほとんどがリボンをつけているが、中には明らかに服装と合っていない者もあり、ユマを苦笑させた。しばらくの間、ユマはその色を見て楽しんでいたが、突然、弾ける様な白肌色が目に飛び込んできたので、思わず、ヒュウ――と口笛を鳴らした。

青黒い、深海からとってきたような色をした髪がそこにあった。やや肩にかかる程度の長さで、肌の色が明らかに違う異国人を除けば、長髪の多い王都では不思議な存在に見える。髪は後ろにまとめており、赤いリボンが可愛げに揺れている。

ユマが注目したのは、彼女が武装していることだった。こじんまりとした気持ち程度の肩当をしており、白い上着を圧迫するように、胸甲の止め具が背中にある。左腰には細工の施された細長い剣を下げている。下半身はといえば、生地こそ頑丈そうだが、ショーツ程度しか肌を保護していないため、ユマのような男でも、眩しいような色をした太腿に視線を奪われないはずがない。軍靴のような物々しい靴を履いているが、それが彼女の姿を一層華奢（きゃしゃ）に見せている。

よく見ると、彼女を中心に人だかりが出来ている。まさかあの太腿を見るためだけに男どもが群がっているわけでもなく、中には女子供もいた。

ユマは気になったのか、アカアの観光名所案内が一区切りしたと

ころで問うた。
「あっ、それは闘士です」
と、アカアが言った。
「闘士……ここには闘技場でもあるのか？」
「では、ご案内いたします」
アカアがいたずらに成功した子供が浮かべるような笑みを見せたので、ユマは自分が的外れなことを言ったのかと思ったが、どうやら違ったらしい。
「いけません、お嬢様。お館様から闘技観戦を禁じられていたはずです」
リンが強い口調でそういうので、アカアは癇に障ったらしく、
「先生を案内してさし上げるの。他意はないわ！」
と、いつになく声を張って言った。それでもリンが引き下がらなかったので、後で母に告げ口をされると叶わないと思ったアカアはユマにすがった。
「いや、禁じられているのなら、別にかまわない」
「先生、それは本当でしょうか。王都まで来て闘技を観ずにいることは、はっきり申し上げて、ありえないことです。西国から海を渡って観戦しに来る貴族もおります。大丈夫です。先生を退屈させたりはいたしませんわ。ですから……」
アカアが上目づかいで寄ってくるので、ユマはたじろいだ。それに、先の女戦士が剣をふるう姿を少しだけ観たいと思った。彼女の白い皮膚が真っ赤な血で染め上がる姿を想像したわけではなく、あのみずみずしい肢体が動く様を観てみたいと思った。
「そこまで言うのなら……」
ユマにしては珍しく、自分の熱さを持て余したような鈍い反応をした。
「ほら、ほら！」
アカアがユマにかこつけて闘技観戦に出かけようとしているのは見えすぎているが、たまにはこのお嬢様のご機嫌もとっておかねば

なるまい――と、ユマは自分の決断をそう評価した。
（まるで子供のような……）
と、ユマは苦笑したが、アカアは今年で十五歳になる。だが、十八までにはどこかの家へと嫁いで行くだろうから、彼女が子供のように振舞えるのは今年で最後かもしれない。後から知ったが、アカアの傍で頭を抱えているリンは今年で十八歳になる。

第二章「闘士衝冠」（2）

闘技場はヴォンの南郊にあるらしく、アカアはいつになく興奮した様子で御者を急かした。その様を見たユマは、自分のせいでアカアが父からの言いつけに逆らったことで、ローファン伯に悪印象を与えやしないか――と、ほのかな焦りを覚えたが、アカアを見るに彼女は両親の愛情をたっぷりと受けて育ったようであり、苦笑と共に彼女を許すだろうと楽観した。ユマはここでローファン伯に対する事後の想像を終えたが、ローファン伯がやさしいのはアカアにだけであり、自分にもそうであるとは限らないという常識が抜け落ちてしまった。ユマにはアカアの気分を損ねてまで闘技場行きを中止する意思はなく、成り行きであるから仕方が無いという、歳不相応な無責任を行っている自覚は無い。ある意味、幼稚な手法ではあるがしたたかに責任を回避したアカアよりも、幼い。

馬車を急がせただけあって、ものの十分で南郊に入った。健脚のヌルが脱落するくらいだから、アカアの興奮は尋常ではない。従者を待つために噴水の前で馬車を止めた。

「光精の泉です」

と、ヌルたちのことなど気にも留めていない様子でアカアが言った。彼らが追いつくまでの間に先生を退屈させないようにしたいと思っているらしかったが、ユマにしてみればそんなものは厚意でも何でもない。

「ここが……あの紋章の？」

国が興った神聖な場所を平然と紹介するアカアが不思議だったが、それもそのはずで、

「これはただの噴水です。光精の泉は、実はどこにあったのかわからないのです。同じ名で呼ばれるものは実は西のリの街にもあり、闘技場や精霊台にもあります。本物がどれであったのかは今や誰にもわかりませんが、王都の人はこれら全てがそうであると認めてい

ます。ただ、光精の泉がいくつもあるのは、さすがにおかしいので、新年を祝うと共にその年の泉が決定されます。今年はこの場所が光精の泉となるわけです」

今、ユマの目の前にある光精の泉は、アカアの言うとおり、何の変哲も無いただの噴水にしか見えない。そう考えてみると、噴水の中央で甕(かめ)から水を注いでいる女神像――恐らく初代オロ王だろうが――が儚く見えた。

アカアが話し終えてから少し後になって、ようやくヌルと数人の従者が追いついたが、ヌルの目に小さな怒気を感じたユマは思わず目を逸らした。

（また、やってくれたわ！）

リンに何やら耳打ちされたヌルは、一瞬、苦虫を噛み潰したような顔をした。彼は小さく舌打つと、

「お嬢様はここでしばしお待ちください。闘技場へは私が案内いたします」

と、アカアの前で跪いた。

「ええっ！　そんなぁ……」

アカアが泣き出しそうな顔をしたので、ユマは思わず彼女を弁護したくなったが、ヌルに睨まれると声が出なくなった。

（お嬢様をこれ以上振り回すな！）

ヌルは十歳の頃からローファン家に仕えている。五歳になったアカアの警護を担当したのは二十二歳の頃で、それからの十年間、彼は心身を賭してアカアを守り続けてきた。ひょっこりと現れた奇妙な旅人に、アカアが夢中になっているのをみて、不快でないはずが無い。

ヌルが本当に恐ろしいのは、アカアはただの興味本位でユマを傍に置いているようだが、それがいつ恋慕の情に変わるかわからないことだ。身分の違いすぎる二人が決して結ばれることはないが、人間の感情はそういった垣根を容易く越えてしまうことを、彼は知っている。ヌルは感情を脇においても、ユマとは根本的に合わぬ何か

を感じており、すぐにでもアカアの元から消えて欲しいというのが、彼の心情だった。根本的に合わぬ何か――というのは、アカアにとって不吉な何か――と同義だ。あえてアカアの意向を無視して彼女の闘技場入りを阻止したのも、ローファン伯の言いつけを守るためでもあるが、それ以上にヌル自身がユマという男に不吉を感じていたからだ。

表面だけを見ればアカアがユマを振り回して遊んでいるだけだが、ヌルが冷静に見てみるに、ユマはアカアの厚意に甘えているだけであり、しかも彼女からそれを巧みに引き出しているふしがある。

ヌルは雄々しく生えた顎鬚（あごひげ）を撫でつつ、ユマの反応を観た。

――なら、そうしよう。父親の言いつけは守るように。

ユマがきっぱりとそう言えば、ヌルは彼を見直しただろうが、当のユマ本人は頭をかいたり、意味のわからぬ笑みを浮かべたりで、何かを喋りだす様子がない。

（こいつは馬鹿だ）

と、ヌルは心中で唾棄した。この程度のことすら自分で決められないのか――と、同じ男として怒りすら覚える。それともまたアカアから情けを引き出そうとしているのか。

「では、行って参ります」

ヌルは冷ややかな口調でそういうと、ユマの腕を強引につかんで馬車へと乗せた。御者は心得ていて、ヌルが何を言わずとも馬車を発した。

「あれ……あれ？」

ユマは戸惑った。自分が行ったことに過失があったのではないかと思い返したが、ヌルの機嫌を著しく損なうほどの何かをしたという自覚は無い。

アカアが見えなくなったところで、ヌルは馬車に飛び乗った。彼が突然相席に座ってきたので、ユマは驚いたが、ヌルは何を言うわけでもなく、無言の圧力をユマに与え続けた。ユマはユマで、彼の悪意を感じ取ったのか、むっつりと口をつぐんだまま一言も発しな

かった。
車輪が、からからと石畳を打つ音だけが、車内に響いた。
さて、闘技場である。
「ローマのコロッセオほどじゃあないが、見事なものだ」
ユマが感想を口にしたように、彼の視界に入ってきたのは石造の円形闘技場だ。高層ではないものの、客席は段々に盛り上がっていて、千人規模の観客を収容できる。
「アカア様がおられないから、中には入れないぞ」
と、ヌルが忠告したが、ユマにとっては外観を見るだけでもそれなりに楽しめた。それにこの人だかりだ。
「この国の戦士は、どうして薄着なんだ？」
ユマがそこらを歩いている女戦士を見ながら言うと、ヌルは表情を変えずに答えた。
「あれは戦士ではなく、騎士だ。赤い四位冠をつけているだろう。それに、四位冠でもあれは闘士賞冠（とうししょうかん）だ」
ヌルが何を言っているのかさっぱりわからないユマだったが、よく見ると、女の頭にちょこんとした冠が乗っている。闘士賞冠というのは、闘士に賞される冠という意味だろうか。だとすれば、目の前の女は高名な闘士かもしれない。
「騎士は薄着なのか？」
「騎士が薄着になるのではなく、闘士がそうなのだ」
「（騎士なのか闘士なのか、どっちなんだ？）……ああ、見世物ってことね」
ユマのその言葉に、背が高く、肌黒い女騎士――あるいは闘士――が振り向いた。目に険の色が見える。
ヌルは慌ててユマの口を塞いだ。
「滅多なことを言うな。殺されたいのか？」
ユマはしばらく口をもごもごさせていたが、何故伯爵に仕える者が、たかが闘士に気を使うのだろうと首を傾げた。

「さあ、もう戻るぞ」
そういって馬車に戻ろうとしたところで、どこからか小さな歓声が上がった。
ユマが振り向いた先には一乗の馬車があった。それを覆うようにして人垣が出来ている。

――クゥだ。
誰かが言った。同時に、馬車を降りるなまめかしい肌色が見えた。
「おや、さっきの女戦士じゃないか……」
ユマは深海のような髪をした女戦士のことを思い出した。髪の蒼さに遠慮するようにして、赤いリボンが風に揺れた。
クゥと呼ばれる女は、ユマが後姿から想像した以上に美しかった。目鼻立ちがしっかりと整っていて、唇が薄く、闘士であるというのに雪のように白い肌には傷一つない。アカアより少し高い程度の背は、闘士であるには不足のように思えるが、岩石のようにごつい女では人気が出ないのだろう。ユマは彼女のことを適当な相手と戦って勝つだけの、アイドルか何かだろうと思った。
（おやおや……ちいせぇ、ちいせぇ）
大きく盛り上がった胸甲の下を想像したユマだったが、腰のあたりの涼やかさからいって、見かけほどではないかもしれないと思い直した。これまでユマが出会った美女にはアカアとリンの二人がいるが、クゥという女闘士からは、二人よりも粘性が少なく、遥かにさわやかで、儚げなものを感じる。奇妙なことだが、闘士であるはずの彼女が三人の中では最もおとなしそうだ。
「あれはクゥ・フェペスだな。こんな時に見られるとは思わなかった」
そう言ったヌルの声が先ほどと違うので、ユマは、おや――と思った。だが少し考えてみると、何のことははない。彼がクゥとやらのファンであるだけだろう。ユマは観客席でクゥに黄色い歓声を上げているヌルを想像して噴き出しそうになった。

「貴族なのか？　冠をかぶっていないけど……」
フェペスという姓を持っているのに、彼女は冠をかぶっていない。
「赤いのをつけているだろう？　あれは闘花冠（とうかかん）と呼ばれている」
ヌルの言葉に、ユマは首を傾げた。この国ではリボンも冠の一種らしい。だが、庶民の女もリボンをつけているところを見ると、もしかすると五位冠より低い、下級貴族の女がするものかもしれない。そのことをヌルに問うと、
「闘花冠は、正確には冠ではない。クゥがいつもつけているから、その名で呼ばれるようになった。ただし、フェペス家は騎士爵だから、当主は四位冠をかぶる」
と、納得のゆく答えをくれた。正式な冠でないのなら、街娘たちがつけてもかまわないだろう。もしかすると、街中でリボンの女を良く見かけたのは、王都の流行のようなもので、それを流行らせたのはクゥかもしれない。
「行ってみるか？　もっと近くで見てみたい」
と、ユマが言ったのは、彼女に興味を覚えたからではなく、ヌルの反応を観たかったからだが、彼はやはりわきまえているらしく、
「これ以上、お嬢様をお待たせしたくない。もどろう」
と、答えた。ユマとしては面白くない。
やれやれ――と肩をすくめたユマを、ヌルは怪訝そうに見ていたが、馬車に乗ろうとしたところで、風が吹き、ユマのつけていた五位冠が飛んでしまった。小さな冠は数十歩の距離を飛んでゆき、人垣をかきわけて進んでいたクゥの足元に落ちた。
「あらら、よく飛んだな」
ユマは的外れな感想を口にしたが、アカアからもらった冠を放っておくわけにもいかず、連れもヌルしかいないことから、乗りかけた馬車を下り、クゥの方へと向かった。ヌルはユマが冠を飛ばされたことを知ると小さく舌打った。クゥと直に話せるかもしれないという淡い期待はあったのかどうか、彼はユマの後を追った。
「うん？」

クゥは足元に落ちた冠を拾い上げると、自分に近づいてくるユマに気づいた。彼女はそれが五位冠であり、自分から手渡す必要がないことを確認すると、近くに控えた奴隷を呼び寄せた。奴隷が冠を受け取り、ユマの姿を認めたところで、それは起こった。

（……あっ！）

ユマが凍りつくと同時に、向こうもこちらに気づいたようだった。

その奴隷は突然、冠を落として棒立ちになった。

観衆がざわめいた。

「何をしている？」

クゥの近くに侍っていた他の者が鞭を片手に叫んだが、奴隷の耳には何も聞こえず、打ち付けられたように一点を見ている。クゥも、周囲の人々も、奴隷の見る先を追った。

ユマは、信じられないものを見ていた。一瞬の間に、今朝見た夢が走馬灯のようによみがえり、最後に自分が落とした冠を拾う奴隷の顔を思い出した。あれは果たして自分だったのか。自分自身のように見えたが、実は違ったのではないか。では、あれは果たして誰だったのかというと――

「木田……」

ユマがそうつぶやく声が聞こえたわけが無いが、奴隷は足の力が抜けたように地に膝をつき、呆然となった。

第二章「闘士衝冠」（3）

（本当に木田なのか？）

いや、そうであるはずが無い――と、言い切れないことが、余計にユマの頭を混乱させた。こんな異世界じみた場所に、何故彼がいるのか。だが、それはユマ本人にも言えることで、自分が神隠しに遭ってオロ王国にいるということは、あの時近くにいた木田もそれに巻き込まれている可能性は十分にある。眼前で呆然としている男は、みすぼらしい衣服を纏っているが、確かに木田だ。

混乱したのは木田も同様だ。彼は少しの間、我を忘れていたが、やがて自分を取り戻すと同時に、ものすごい勢いでユマに擦りより、

「湯山、助けてくれ！　俺だ。木田だ！」

と、叫んだ。

「木田……木田なのか。本当に木田なんだな？」

ユマがそう言うと、木田の目元がじわじわと赤くなり、やがてそれは熱い液体でいっぱいになった。

（奴隷にされた……）

ユマが、アカアに助けられたときにほのかに感じた不安。それが現実となって目の前にある。木田の髪はぼさぼさで、目元が黒ずんでいるのは、満足に眠れないほどに酷使されている証拠だろう。

咳払いが聞こえた。あたりを見ると、クゥを取り巻いていた観衆の視線が自分に集まっている。声のした方を振り向くと、渋面を作ったヌルの姿があった。

「その薄汚い奴隷は、先生の知り合いか？」

冷めた声だった。

――ほら見ろ。やはり得体の知れない奴だ。

という心中の声が聞こえてきそうだ。ユマは冷や汗をかいた。この場にアカアがいない不利に気づいたからだ。木田を奴隷の身分から解放するためには、あのクゥとかいう女闘士を説得しなければな

らないが、ヌルが骨を折るとは思えず、また彼にはその権限もあるまい。伯爵家の令嬢であるアカアなら、先生と慕うユマの友人を救えるかもしれない。ユマはやはりアカアと共に来るべきだったと後悔したが、同時に――アカアと連れ立ってここに来たとしても、今頃闘技場の中を見て回っている頃であり、ユマは木田には気づかなかっただろう――という直感にも似たものを感じた。容姿、表情のどちらも木田の変わりようは激しく、彼が自分に声をかけてくれなかったら、ユマは疑念を疑念のまま胸にしまいこんでいただろう。怠け癖のこびりついたユマには運命論者的な一面があって、アカアが共にいれば木田を見つけることは出来ず、木田を見つければアカアの助けを得ることは出来ない巡り合わせのようなものを、この時感じた。

（でも、まだ間に合うかもしれない）

ユマはヌルに、アカアを連れてきてくれないか――と、丁重に頼んだ。

――何故、俺が貴様のために……

声を聞かずともわかる。だが、何をやっても木田を救いたい。悪事に手を染め、そして裏切った自分を追い回した木田を、ユマはもう憎いとは思わない。あれは自業自得だとも思っている。木田に対する嫌悪や侮蔑の感情が空気の抜けた風船のようにしぼんでゆくのは、それほど今の彼の境遇が哀れであるからだ。ユマはアカアにつく奴隷がどれほど酷使されているかを短期間ながらも見知っており、彼らの暗く沈んだ視線に耐えられない時がある。

「ここに連れてきてくれたら、俺の持っている物の中から、お前が望むものをひとつやろう」

ユマがそう言った時、ヌルの目が光った。

（廉直（れんちょく）な男だと思ったんだが……）

ユマはヌルに、軽い失望を覚えた。この時、彼はヌルを欲深いとみたが、腕時計や毛布くらいしか財産を持たないユマが、たった一つの物品でもって木田を助けようというのは、いかにも吝嗇（りんしょく）だ。こ

こは、財産の全てをはたいてでも木田を助けるべきであり、それを行えば、アカアは敬仰するユマ先生がそこまでお認めになる方とはどんなお人か――と、木田の保護に興味を示すはずであり、また、ユマの情の厚さを知り、一層信頼を寄せるだろう。だが、今のユマにはそこまで考えるゆとりもなく、またそれだけの機転もきかない。

「では、お前が腕につけているそれを貰おう」

と、ヌルが言ったので、ユマは左手首につけた腕時計を外して、彼に投げあたえた。

「急げ！」

ユマらしからぬ叱声を受けて馬車を出したヌルは、しかし腕時計を気に入ったのか、飛ぶように馬車を走らせた。

「お嬢様をお呼びしたところで、どうにもならんだろうが……」

ヌルは意味深な言葉を残していったが、それを気にしている場合ではなかった。

取り残された感じでユマとヌル、それに木田のやり取りを見ていたクゥは、ヌルが馬車を発するのを見てようやくユマに声をかけた。

「我が家の者に何か？」

目を閉じて聴けば深窓の麗人を思い浮かべたくなるほどに、儚く澄んだ声である。

（なるほど、アイドルだ）

と、ユマは半ば安心した。ユマは威圧されると話し辛くなるほどには気弱ではなく、逆にすぐ頭に血が上ってしまう気性の荒さに自分で気づいており、なるべく穏やかに木田を引き取りたい。

「この男、私の友人でして、どういった経緯で貴方の下にいるのか。教えていただけないでしょうか？」

ユマはまず、下手に出た。こういう時の交渉は機先を制した方が利を得る場合が多いが、ユマは彼の半生における人付き合いの浅さを、ここで――人知れずだが――露呈していた。いつもの彼らしく、ぶっきらぼうに話せばよかったのだ。

「友人……この者は奴隷市で私が買ったのだが……それ以前に貴方が何者か、お教え願えないだろうか？」
クゥはやや不機嫌そうにユマに問い返した。彼女に倣って、周囲から、
――軽々しくクゥ様に話しかけるな！
といった野次も飛んできた。
ユマは少し迷った。ここでローファン伯の名を出すべきか迷ったのだ。だが、「私は異世界の東京から来た湯山翔です」などといえば狂人と思われるだけだろう。
「これは失礼いたしました。私はローファン伯爵家の令嬢アカアの客人で、ユマ・カケルと申します」
ユマはクゥの反応を待った。彼女が伯爵の名を聞いてたじろぐのを期待したのだが、事はうまく運ぶものではないらしい。
「ローファン伯のご息女……それで、貴方はこの者をどうしたいと仰るのです？」
クゥが抵抗無く話を進めるので、やや外された感のあるユマは、しかし本題に入った。
「ぶしつけながら、その男を譲っていただきたいのです」
と言ったとき、先に木田の正体をばらさなければ、安く彼を取り戻せたかもしれないと後悔した。ローファン伯の庇護にある――実はまだそうではないが――者の友人と知って、相手にふっかけられることを懸念したのだ。
（どうも俺は正直すぎる）
と、ユマは自分の人の良さを嗤ったが、彼は人がよいというよりはただ単に思慮が足りないだけだろう。二十代の半ばにある男にしてはいかにも頼りない。
この時のクゥの反応は、ユマの予想だにしないものだった。
クゥの顔がみるみる蒼ざめ、刺すようにしてユマを睨めつけてきた。
「ヤムの犬らは、ティエリア・ザリの肉では食い足りないらしい！」

取り巻きの一人がそう言うと、周囲が一斉に殺気立った。
ユマはこの台詞の意味は理解できないが、どうやらローファン伯の名を出したのがまずかった。フェペスの一家から相当に嫌われているらしい。
「この者は既に我が家の家人だ。一家の者をヤムの家に売ったとなれば、先代に合わせる顔が無い」
横からしゃしゃり出て来たクゥの付き人が激しい勢いで言った。クゥは彼を制したが、小さく頷いた。
いくら金を積まれても木田は渡さぬ――と、そう宣言されたユマは目の前が真っ暗に沈んでゆくのを感じた。いや、ユマはまだ良い。この時最も絶望したのはユマの膝元でそれを聴いていた木田だろう。
（確かにアカアが来てもどうにも出来そうに無い。いや、むしろ悪化する……）
ヌルが言ったことを思い出しながら、ユマは自分が腕時計を騙し取られたことに気づいたが、それ以上に、この場にアカアが現れて騒動にでもなったら、ユマを伯爵家から追放するよい口実になる。当然、ヌルはそこまで見越していただろう。
（ヤバイ、まずい。どうにかしないと……）
木田を助ける以前に、自分の身も危うくなりそうなことに気づいたユマは、徐々に顔色が蒼くなり、表情にもあせりの色が表れた。
そんな彼に鞭打つわけでもないが、クゥは闘技場の方を指差し、
「どうしてもと仰るのであれば、その者とともに闘技場に参られよ――」
と、冷ややかな口調で言った。闘技を行って勝ち取れということらしい。
（闘技場……）
冗談ではない。死んでしまう。
「少し、この男と話をさせていただきたい……」
ユマは力ない声で言った。木田が奴隷に落ちぶれたいきさつを知れば何か手がかりがあるかもしれないと思ったが、クゥというより

彼女の周囲の者がそれを許さなかった。
奴隷の長と思しき者が、鞭を振り上げた。もうこれ以上、お前の話には付き合えぬ――という意思表示だ。それを知った木田が悲鳴を上げた。いや、彼の場合、この後どういう目にあわされるかわからない。
「湯山、助けてくれ。何でも、何でもするから……」
ユマはきつく口を縛ったまま動けなくなった。だが、木田に揺すぶられる度に、剣を持って闘士と戦う無謀さによろめきそうになった。
（木田は助けたい。でも、俺が死んでも無意味じゃないか……）
という、ユマの心情は本心ともいえなくないが、それでも偽善が残っている。ユマ自身気づいていないが、彼が声を大にして言いたいのは、
――無傷で木田を手に入れたい。
むしろそれが当然であるという無意識だ。
鞭が鳴った、ユマの眼前で空を裂いたそれは、直後に木田の背を打った。
「きゃあ――！」
木田は仰け反りながら、女のような悲鳴を上げた。
「待て。待て。闘技場に入れっていうけど、俺は誰と戦えばいい？」
目の前の惨状に慌てたユマが言うと、クゥは胸に手を当て、
「この、クゥ・フェペスと――」
と、答えた。ユマの目が光った。
（勝てるかもしれない……）
抱けば折れてしまいそうなクゥの柔腰を見て、そう思った。この女が自信たっぷりに言った事実を、ユマは意識していなかった。それに――
（木田は剣道をやっていたな）
と、思い出した。高校の頃、全国大会で準優勝したほどの実力者だ。今はなまっているかもしれないが、ユマのような素人にはこれ

だけでも好材料といえる。ユマは先に、木田を取り戻したければその者と共に闘技場へ立て――と、クゥが言ったのをしっかりと憶えている。

「いいだろう。受けよう……」

思わぬユマの声に、人垣が揺れるようにどよめいた。

クゥは驚いたようにユマを見つめたが、やがて――

「では、七日後に竜機戦を行います」

と、宣言して身を翻した。方形の耳飾が凛(りん)と鳴った。

周囲のどよめきは歓声に変わった。その歓声の中で、木田はようやくユマの足から離された。

「ありがとう。ありがとう……」

泣きじゃくりながらそう言っていた。

「七日後だ。それまで、どうにか生き延びよう……」

竜機戦というのはもしかすると戦車戦か何かだろうか――と、クゥが女の不利を脇に置いたような話し振りをしていたこととあわせて思い出したユマは、少し不安になったが、あえて打ち消した。いざとなれば、木田に頼ればどうにかなるという楽観もあった。

クゥが闘技場の中に消えた後、彼女を取り巻いていた野次馬が散々罵ってきたが、それに耐えかねた頃、機を見計らったようにしてヌルがアカアを連れてやってきた。

ユマはヌルに殴りかかろうとする自分を必死に抑えた。

第二章「闘士衝冠」（4）

「ええっ――！　試合うのですか？　あの『闘花（とうか）』と……」
ユマが事の顛末を告げると、アカアは闘技場を楽しみにしていた感情が全て吹き飛んだようだった。
「成り行きで、な……」
ユマが歯切れ悪くそう言うと、それを横目で見ていたヌルが、ふん――と、鼻を鳴らした。
「あのクゥに挑戦なさるほどですから、先生はよほど闘技に自信がおありなのでしょう……」
と、いらぬことを言ったときは、額の皮の下の血管がぶちきれるかと思ったが、闘技場に立つ羽目になったのは事実だ。
「あの女はそんなに強いのか？」
「百戦百勝です」
アカアは上ずった口調で言った。興奮してきたらしい。
「百戦？」
「いえ、言い過ぎました。確か……」
「三十二戦全勝だ」
と、ヌルが言った。
闘技がどのようなものか、ユマは具体的には知らない。ただ、クゥはやはり見かけどおりの華奢な女ではないらしい。三十二回防衛しているボクシングの国内チャンプが相手だと想像して、ユマは自分が浅はかな幻想を抱いていた愚かさを知った。
「強いのか？」
「ただの女子が勝ち続けられるほど、闘技は甘くない」
ヌルはユマの甘い観測を見透かしたように言った。
「竜機戦と言っていたが、それはどんなものかな？」
ユマは髭の薄い顎を撫でた。何だ、そんなことも知らずに試合を受けたのか――と、ヌルは侮蔑の表情をあらわし、アカアは呆れた。

「竜機というのは――」
と、お喋り好きなアカアが説明を始めた。
ユマは竜機戦について、騎馬戦や戦車戦を思い浮かべたが、結果としてはそれにやや近く、しかし想像を超えたものだった。
竜機とは、確かに乗り物ではあるが、車輪のついた戦車ではなく、術の施された特殊な装甲のことらしい。ものによっては馬車のように大きいと言われて、ユマはまさかロボットじゃないだろうな――と、苦笑いしたが、彼女の説明を聞く限りその通りに解すしかない。
ユマにとって致命的だったのは、竜機が術士ではないと扱えないという事実だ。ユマは術士というものを想像でしか知らないが、その術士ではないユマに対して、何故、このような理不尽な条件を、クゥがつけてきたのか。

「冠のせいです」
と、車中でユマに言ったのはリンだった。ユマのつけている五位冠は、術士がかぶる類のものらしく、クゥはそれを見てユマを術士と勘違いしたのだろう――と、彼女は付け加えた。アカアは確かにユマを術士としてとらえていたが、彼女の厚意が裏目に出た。元はといえばユマが原因であることは言うまでもない。
リンの目に不安の色が浮かんでいる。アカアはお祭り気分であり、ヌルは対岸の火とでも言わんばかりであるから、現時点で心からユマの身を案じているように見えるのは、リンだけかもしれない。
（こりゃあ、まずった……）
どうにかして試合を取り消さなければならない。ユマが術士ではなく、竜機に乗れないとわかれば、
――では、剣にてお相手しよう。
と言い出されかねない。二対一ならまだ勝ち目があるかもしれないが、向こうがこちらと人数を合わせた場合、自分は一瞬で死ねる――と、ユマは悪寒が走るのを感じた。
伯爵邸に戻ると、一乗の豪奢な馬車が庭先に止められていた。

「お父様がお帰りになられたのだわ」
アカアは久しぶりに父と対面できるのを喜んだ。そんな彼女の表情からは、ローファン伯が気難しい男だという想像はできない。彼女のような明るさを持つ父であることを、ユマは願った。
屋敷全体が哄笑(こうしょう)で満たされたかのようだった。その豪快な笑声の主はローファン伯その人である。
「フェペスの女に喧嘩を売ったか。アカアの言う通り、面白い御客人よ！」
再び、哄笑。
髭の濃い顔だ。よく整えられた髭で、特に鼻下のそれに気品を感じる。アカアの目元は父に似たのか、大きな目をしていて、全体的に顔が四角い。よく張った顎が特徴の大柄な男だ。歳は、まだ五十を過ぎていまい。
ローファン伯が自分に好感を持っていると知って、ユマは安堵した。ひとつの危機を乗り越えたと思ったからだ。だが、ローファン伯の庇護を得ることは彼の初期の目的であり、現在の困難は何も解決していない。ローファン伯がクゥと対立したユマを称賛するので、かえって試合の棄権を言い出しづらくなった。
「ヤムとは何のことでしょうか？」
まずは夕食の席を利用して、遠まわしに話を進めなければならない。ただし、ローファン伯が明日の晩餐にもユマを参加させると決まったわけでもなく、話を切り出すとすれば今夜しかない。
「ヤムは我が家の姓よ」
と、ローファン伯は大きな声で言った。なるほど、伯爵を名乗るにふさわしい豪快な人だ。アカアのお転婆な一面は十分に彼から受け継いだものだろう。
「なるほど……」
ユマはフェペス家との怨恨については触れなかった。ティエリア・ザリというのが何なのかも知りたかったが、ローファン伯の機嫌を

損ねてしまう可能性があるし、あとでリンにでも聞こうと思ったからだ。
ちなみに、ローファン伯の姓がヤムというのは、ローファンという氏は飽くまで封地名で、普通、封地を持つ貴族の者は名と姓と氏とを持っている。アカアの場合はローファンに封じられたヤムの家のアカアという意味で、アカア・ヤム・ローファンが彼女の正式な氏名だ。
ユマは、すると三つ目の名前を持たないクゥはどうなるのか――と思った。クゥ・フェペスのクゥが名なのだろうが、フェペスが姓であるのか、地名であるのかわからない。前者であれば彼女は領地を持たない下級貴族であり、後者であれば姓を持たずに領地を持つ新参の貴族かもしれない――と、想像を働かせた。後で明らかになったことは、クゥの場合は前者であるということだ。しかも彼女の家を没落させたのは他ならぬ先代のヤム家当主であるという。

話をもどす。
ユマはどうにか試合を棄権する方向に話を持ってゆかなければならない。
（まだ、俺には車がある）
車をローファン伯に献上するという意味だ。解体してその機能を分析すれば、オロ王国で産業革命すら起こしかねない技術と文明の結晶である。ローファン伯がどのような男であれ、それを欲せぬはずが無く、ユマはこれをだしに試合の棄権と、木田の救出の両方を掛け合うつもりだ。
ちょうど、話が車の話題になった。ローファン伯はあらかじめ聞き知っていたらしく、
「ぜひともこの目で見てみたい」
と、大きな目をぎょろりと向けて言った。
――見るだけでなく、実際に乗せて差し上げましょう。
まずはこの台詞から切り出すつもりだったユマは、喉元まで声が

でかかったところで止まった。
止まったのは彼ではなく、その場の空気だった。近臣の者が小走りで入室すると、何やらローファン伯に耳打ちした。
（嫌な予感がする……）
こういうときの嫌な予感はよく当たる――と、思った矢先にローファン伯から声がかかった。
「ユマ殿。フェペス家の者が汝（なんじ）に会いたいそうだ。私も同席するゆえ、食事後にご足労願えまいか？」
よく通る声だ。ユマは出鼻をくじかれたような気分になったが、
（待てよ。木田かもしれない）
と、思い直し、「喜んで」と即答を与えた。
屋敷に太陽が飛び込んできた――と表現したくなるようなローファン伯の登場だったが、からからと笑みのこぼれる夕食の席で、ユマ一人だけが沈鬱な表情を隠さなかった。横で手洗い用の水を汲んで立っているリンだけが、人知れずユマの空気に同調していた。

第二章「闘士衝冠」（5）

ローファン伯は屋敷内の一室にユマを案内した。そこに一人の男の姿があった。

伯爵邸を訪れたのは、木田ではなく、クゥの傍に侍っていた側近だった。

――ヤムの犬ら……

と、ユマを罵った人物だ。

伯爵が入室すると、男は立って一礼した。ローファン伯は、無言でその者の前を通り、正面の椅子に腰をかけた。ユマは伯爵の横に座ることは出来ず、横向かいに席をつけた。

クゥがよこした使者の名をホルオースというらしい。ふるわぬ貴族の僕（しもべ）がいかにも似合いそうな、陰気な中年の男だった。

「して、何用か？」

と、ローファン伯はやや高圧的な態度を表した。明らかに家格に差があるのだろう。フェペス家の当主がつけるのは四位冠で、伯爵は豪奢な金の飾りがついた二位冠をつけていることからも、これは容易に想像できた。

ホルオースは、まずローファン伯に、ユマとクゥが闘技場での試合を確約した経緯を語った。

「御友人が奴隷に……か」

何でもない。先ほど食卓でユマが話したことと大した違いは無い。だが、伯爵はあえて話を区切り、ユマにだけ理解できるように、

「そのキダという者も、あれを持っているのか？」

と問うた。あれ――とは無論、自動車のことだ。

「はい。ですが、今、彼の手元にあるかはわかりません」

ユマは正直に答えた。木田が車ごと神隠しに遭ったという保証は無い。例えそうだったとしても、彼が奴隷に落ちた時点で手放していないはずはないだろう。自分のように乗り捨てでもしない限りは。

ホルオースは二人の会話を理解できなかったが、早めに用件を済ませたいのか、ひとつ咳払いをした。
（よほど、この家が嫌いらしい……）
と、ユマが思ったのは、ホルオースの態度にある種のふてぶてしさがあったからだ。これが多少、ローファン伯の癇に障ったらしく、伯爵がいらいらしているのを、ユマはやや不安げに横から見ていた。
「伯爵殿に申し上げますのは、これが王覧試合になるということです。恐らく明日、王宮から正式な使者が送られることでしょう」
王覧という言葉にユマが耳を疑ったところで、ローファン伯は興奮をあらわにした。
「おお！　光王御自ら御覧になるのか」
王が観覧する――と聞いて、ユマはもはや試合を中止するのは不可能だと思った。大体、クゥとユマではなく、フェペス家の使者とローファン伯が話を進めているという時点で、これは私闘ではなく、決闘であり、門閥闘争であるともいえる。
（自分からすすんで鉄砲玉になったのか。俺は……）
我ながら、何という浅はかな決断をしたのだ――と、ユマは頭を抱えたくなった。あの時、試合の確約さえしなければ、他に木田を救出する方法がいくらでもあった。わざわざ自分で選択肢を潰しておいて、しかも最も困難なものを選んだ辺りがどうしようもなく馬鹿らしく、惨めに思えた。だが、悲観もしていられない。ユマが負ければ、王前でローファン伯の顔に泥を塗ることになる。たとえ試合で死に損なっても、伯爵は自分を放逐するだろう。最悪、車だけ奪われて殺されるかもしれない。
荒野に放り出されて飢えかけた挙句、幸運にも貴族の娘に拾われたと思えば、今は絶対に負けられぬ困難な闘いを強いられる。ユマはオロ王国に迷い込んで、栄達とは程遠い退屈な日常が吹き飛んだことを心のどこかで楽しんでいたが、今はそれが幻想でしかなかったことを思い知らされた。
ユマは後悔したが、その度に木田の言葉では表せない沈痛な表情

が思い浮かんだ。
「いつ以来だろうか。闘技場で賭けを楽しむのは……」
ローファン伯はしみじみと言った。ユマは賭博についてローファン伯が言及したことに疑問を持たなかった。王自らが臨席するほどの試合であれば、大金が動いて当然だろう。
ユマはふと、ローファン伯がアカアに闘技観戦を禁じたのは、ユマとクゥとの間で起こったようなトラブルが結構あって、娘が軽薄にも無理な博打に手を出さないように戒めたためであるかもしれないと思った。それでいて彼がどこか楽しそうなのは、本心では闘技を愛して止まないのだろう。

ホルオースは、試合の日程、時間、闘技形式を改めて確認した。ユマが望んだように、こちらは二人で、相手はクゥ一人だった。
「それなのですが……」
今更ながら、ユマは自分が竜機を扱った経験が無いことを白状した。ローファン伯の反応はアカアと全く同じで、あからさまな侮蔑の色すら見えて、ユマを失望させた。が、ホルオースの方は違った。
「心得ております。キダが申しておりましたから」
と、言ってユマを驚かせた。ここからは、木田もユマと同じように、キダと呼ぶことにする。
（あいつめ。バラしやがったな！）
ユマは、あえて敵に弱点を告げたキダの軽忽（けいこつ）さをなじりたくなったが、やはりキダのやったことは正しい。現に竜機を扱えないことで、試合にすらならない可能性があるからだ。それはそれで、剣の試合に持ち込むという目算もユマにはある。勿論、相手がクゥひとりならばという条件付きだが。完全にキダ頼みであることは、ユマは自分が彼を救ってやる立場にあり、死に物狂いになるのはキダの仕事として当然のことだと考えているからだ。
それにしても、扱えないから試合形式を変えて欲しい――と、頼むのではなく、より強気に、

――我ら異文化の者ゆえ竜機などは知らぬ。お前も戦士なら剣闘にて決着をつけよう。
とでも言えば多少は格好がついたのに、と、ユマはいらぬ意地を張りたがった。
「クゥ様から、ユマ殿への伝言です――」
ホルオースはあえて感情を殺した目でユマを見た。そこに計り知れない悪意のようなものを感じたユマは、思わず目をそらしたくなったが、
（喧嘩はもう始まっている）
と思ったのか、背筋を伸ばし、静かに睨み返した。

――聞く話によると、ユマ殿は遠い異国より参られ、術士でありながら竜機を扱われたことが無いという。私は王覧試合にて情けない闘士と闘うことは忍びなく、よってユマ殿に闘技場の竜機を貸し与えよう。期日までに乗りこなし、キダが竜、ユマ殿が機となり、私の竜機と技を競えることを心待ちにしている。闘技場は異国の魔術が禁じられているが、二対一とはいえユマ殿の不利も鑑み、今回はそれを不問とする。存分に魔術を披露なされよ。王もそれを心待ちにしておられることだろう。また、決闘を控えた闘士は試合の期日まで生命の不可侵権を光王より認められている。故にフェペス家に挑戦する立場になったキダの身の上を、ユマ殿が案じる必要はない。

ユマはぽかんと口を開いたまま、絶句していた。それもそうだろう。どうやって逃れようかと苦慮していた難題を、迷惑なことに敵が解いてくれたのだ。ただ、
――術士でありながら……
の一言は、どうしても聞き捨てならなかったが、
（使えるかもしれない）
と、思い直した。なるべくこちらの引き出しが多いように見せておきたい。ユマが術士であるとクゥに吹き込んだキダの狙いも同じ

ところにあるのだろう。
クゥの付けた条件で最大の難関は、やはり竜機を扱うという一点だろう。たった一週間で何が出来るかといえば、心もとないが、それでも状況は随分好転したのではないか。
（いや、やっぱり悪化している）
試合を取り消すのが最上である以上、どうしてもクゥと闘わねばならないのはユマにとって挫折以外の何ものでもない。ただ、この条件を引き出すために、キダがどれほど苦心したかは伝わってくる。
何も知らないユマのためにホルオースは先の言葉に説明を付け加えた。
キダが竜、ユマが機というのは、竜機の操縦はユマが行い、竜――すなわち槍で闘うのがキダの役目という意味らしい。通常の闘士はその両方を一人で行う。戦車戦で例えれば、ユマが御者で、キダが車上の戦士といったところか。クゥは手綱を片手に剣をふるうということになる。
まだ試合を中止するために粘るべきか――とも思ったが、もはやそんな機会はとうの昔に去っていたことに気づき、ユマはクゥの厚意を受け取ることにした。心配だったのは、クゥに悪意はないだろうが、結果的にユマを小馬鹿にしたような提案が、ローファン伯のプライドを刺激しないかどうかだが、それには及ばなかった。
――竜機を乗りこなせぬ場合は、試合を中止したい。
などといえば、ユマが飛び上がって喜んだだろうが、ローファン伯が言及したのは、クゥが勝利した場合の報酬についてだった。ユマが勝てばキダを得られるが、クゥが勝った場合はどうなるのか。
「ティエレンの地を、頂きたく……」
ホルオースが小さく頭を下げたところで、叱声が飛んだ。耳が震えるような大声で、声の主はローファン伯しかいない。
「たわけが！　己が身を傷つけずに故地を得ようとは片腹痛いわ。どうしてもその条件でというのなら、我らが勝った時は、フェペスの小娘を奴隷にしてやる！」

そこまで涼やかな態度を崩さなかったローファン伯が、豹変したように怒りをあらわにした。だが、ユマにとって恐ろしかったのは、確かに彼の大喝もそうだが、それ以上に、ローファン伯が「我ら」と、ユマのことを呼称したことであった。

どう考えても、クゥ――というよりフェペス家は、ヤム家に復讐するための機会をうかがっていて、ユマは自分がそれに利用されたという感想しか出てこない。ヤム家もフェペス家には良い感情はもっていないらしく、ローファン伯がクゥのことを「己が身を傷つけずに……」といったのは言いすぎに思える。彼女自身、自分の命をかけて闘うのだ。それともこの言葉はフェペス家の当主に向けたのだろうか。

（そうだ。命をかけてるんだ……）

ユマは閃いたことがあった。だが、あまりにも子供っぽいその思い付きを口にすべきか迷った。

幸い、ローファン伯が機嫌を損ねたため会話が止まっている。言い出すとすれば今しかない。

「ひとつ、お伺いしたいことがあります。ご返答によっては、私からも条件をつけさせていただきたい」

冷静に考えてみると、ユマは自分にもルールを決める権利くらいはあるだろうと思い立った。先のはクゥの提案に過ぎない。これは喧嘩でも戦争でもないのだから、双方が合意しなければ試合自体が成り立たないはずだろう。

ホルオースは、ローファン伯が怒っているので、助かったようにユマの顔を見た。ただし、声には出さなかった。

「勝敗の条件は何なのでしょう？」

「どちらかが、敗北を認めるか。さもなくば死ぬか……です」

ホルオースの淡白な答えようは、決まりきったことを聞いてどうする――とでも言わんばかりだが、ユマはそこを突くしかないと思った。彼の心中に芽生えたのは、事態を好転させる秘策ではなく、いわば保険がけだ。

「それであれば、私からも条件を出したい」
ユマはローファン伯の興味をひくように、あえて彼の顔をみた。
（案の定、怒っているわけじゃなさそうだ）
この人はこの人で、フェペス家を潰す算段をしているらしい――と、ユマはフェペス家の当主に代わって、首に白刃を当てられたような気持ちになった。
「この勝負、対戦相手を死に至らしめた者を負けとしたい」
「は？」
ローファン伯とホルオースが同時に声を上げた。話にならぬと思ったのか、それともあまりにも意外すぎて声が出てしまったのか。
「この国でもそうだと思いますが、私の祖国では殺人が最も忌まれます。たとえ試合にしろ、相手を死に至らしめるなどといった行為は事故では済まぬのです（実際は済む場合もあるけど……）。私はオロの法を犯すつもりはありませんが、故郷を離れても祖国の法に触れることは許されないのです」
ユマはわかりきったことを言っているつもりだったが、王都に至る道中でアカアが奴隷に見せた酷薄な一面を思い返すと、やや不安があった。それでも死ぬかもしれない勝負というものは出来る限り回避したいというのがユマの主張だった。
（俺はもう、一回死にかけたんだよ！）
無人の荒野をさまよっていた自分を思い出したユマは、あの頃の自分がかなり無謀な博打を打っていたことに寒気すら感じる。それをまた繰り返す者がいるとしたら、ただの馬鹿にしか思えない。
二人が押し黙っているので、ユマはやはり自分が的外れなことをいったのだろうと思った。だが、ホルオースは少し沈黙した後、
「主に諮ってみます。ただし、これは光王のご認可が必要になるかもしれません」
と答えた。ユマは、闘技場の経営者はもしや王室なのではないかと思った。国営の賭博場を思い浮かべたのだが、そういえば――と、ヌルが闘技場で嫌にユマの動向に敏感だったのを思い出した。

ホルオースが屋敷を出る際、ユマは、
「クゥ殿に、ご厚情感謝する――と、伝えてください」
と言伝を頼んだ。ホルオースはまんざらでもない顔つきで、
「必ず……」
と言って去った。

第二章「闘士衝冠」（6）

次の日の朝、ユマは早速闘技場に向かうことになった。
寝こけていたところをヌルに蹴飛ばされて起きたのだから、最悪の寝覚めと言える。
「ふわぁ……まずは、竜機とやらを見ないとな……」
ユマはリンをみて挨拶すると、ヌルのことは全く無視して着替えと朝食を終えた。
どうやらユマが寝ている間に王宮からの使者が伯爵邸を訪れ、試合の認可が正式におりたらしい。この一事をとっても、もはやこの試合がユマの手を離れていることは明白だった。
ユマの付き添いをローファン伯に命じられたヌルはいかにも不機嫌そうだったが、
「いいじゃないか。クゥ様と話せるかもしれんぞ」
と、ユマになじられて顔を青くした。ヌルの自分に対する悪印象は拭いがたいと思ったのか、ユマは彼に遠慮が無くなった。
「行ってらっしゃいませ」
丁寧にお辞儀するリンに向かって、
「何、ちょいとオロの玩具（おもちゃ）で遊んでくるだけさ」
と、愛想良く声をかけると、彼女は小さくはにかんで、妙に上機嫌な客人を見送った。

屋敷を出ると、路傍にて彼を待っていた人影があった。一人はホルオースで、もう一人はなんとキダだった。馬車があるが、乗るのはホルオースだけで、キダは徒歩でここまで来たらしい。
「貴方に教えていただけるのかな？」
あまりにも上機嫌なユマをみてホルオースは首を傾げたが、キダは終始押し黙っていた。ユマも、特に彼に話しかけることはしなかった。

ホルオースの言うところ、闘技は市民が仕事から解放される午後五時過ぎから開催されるのが決まりであるらしく、ユマは昼過ぎまで竜機の訓練を行ってよいとのことだった。

「郊外へ出て練習させられると思ったんだが、随分と用意がいいな」

と、言ったのは、この破格の待遇にヌルでさえも唖然としていたからだ。

「それだけ、光王が貴方に期待なさっておられるのでしょう」

ホルオースが言うと、ヌルが鼻を鳴らした。

（嘘を言え。逃げ出さないように監視するためだろう……）

ローファン伯から頂いた書状を受付で見せると、闘技場の大きな門が開き、闘士たちの聖地に通された。円形の広い空間である。乾いた砂を押し固めたような黄色い地面が見え、がらがらの観客席は、その空虚の大きさにかえって圧倒されそうだ。

「あれが、竜機です」

と、ホルオースに言われずとも、ユマの目はそれに釘付けだった。

アカアの説明を聞いたところ、ロボットのようなものを想像したユマだったが、目の前にある奇妙な金属の固まりは、どちらかと言うと首の無い竜の彫像に鞍をつけたような形をしていて、竜機というよりは竜騎というべき乗り物だ。バスケットのような丸く窪んだ操縦席があり、それに足を二つ生やしたようで、後部にはおそらく平衡を保つための尾らしきものがある。前面には小さな手が二つついており、その両方に鋭い槍を持っている。ただし、今は無人であるから、二つの足を折って座っている状態である。

ユマとキダは、立ち並んだまま無言でそれを見ていた。幼い頃、親にせがんだプラモデルがあったが、その頃の自分たちがこれを見れば嬉々として飛び乗っただろう。だが、今の二人にとってこの首なしの竜にも似たものは、自分たちを黄泉へと誘う死出の舟でもある。

これが歩く――と聞いたユマは驚くと共に、その際の激しい揺れに酔ったりしないか心配になった。

（何で出来ているんだろう？）
竜機の表面を軽く叩くと、金属にしてはやや軽い音が鳴った。肌触りは滑らかで、土で出来ているようにも見えない。
「これは二対二の闘技で使用するもので、普通の竜機より大きく、強力です。座席の前部が機、後部が竜となっております。機に乗る者は両足を操り、竜に乗る者は両手を操るという意味です。両者の呼吸が合わなければ、竜機は動きません」
ホルオースの説明を簡単に聞いた二人は、まずは竜機に乗ってみることから始めた。
「祈りを済ますように……」
乗り込もうとする二人を咎めるような声を出したのは、ヌルだった。
「オロの闘士は闘技場に立つとき、必ず神に祈る。お前たちは決闘をするわけではないが、闘技場で竜機を駆る以上、泉にて神に誓いを立てよ」
ヌルは観客席に割りいるようにして闘技場の端にある泉を指差した。そういえば――と、ユマはアカアが闘技場にも光精の泉があると言っていたことを思い出した。
信仰とは無縁のところにあるユマは、神に祈れと言われて苦笑した。
――神とは？
と、ヌルに聞いたならば、
――精霊王である。
と、彼は答えるだろう。そんなことは道中でアカアに聞いているユマは、食事前に彼女が胸の前で両手をへの字に合わせているのを真似て、誓いの言葉をしばし考えた後、思いついた言葉を呟いた。
「精霊王よ。この揺れの激しそうな不細工な乗り物で二人が酔いませんように、ご加護を――」
横でそれを聞いていたキダは噴き出しそうになったが、あえてユマに倣って神に祈った。

操縦席に乗り込んだ二人は困惑した。操縦桿(そうじゅうかん)やその類のものが全く見つからなかったからだ。それに内部は外と比べて粘土のような物質で固められており、何やら乗り心地が悪かった。
「内部は魔灰(まはい)と呼ばれる土が塗られております。魔灰は精霊の死骸ともいわれていて、念じて魔力を送れば、動きます」
というホルオースの説明は簡潔なだけに、最悪にわかり辛く、二人はしばらくの間、何も出来ないでいた。

ユマとキダがやきもきしているのを傍目でみていたヌルは、おもむろにホルオースに近づいて声をかけた。
「あの二人、どう見る？」
まさかヌルに話しかけられると思っていなかったホルオースは、探るような目でヌルを見た後、感情の無い声で答えた。
「異国の術士とはいえ、クゥ様に敵うわけはないでしょう」
「そうではない。俺が訊いたのは、あの二人が何者か――ということだ」
ホルオースの視線があがった。ヌルの言わんとしていることがうまくつかめないらしい。
「東方の出であるとのことですが……」
「それよ――」
ヌルが声を上げると、操縦席の二人が驚いたようにこちらを見た。ヌルは、何でもない――と、言わんばかりに手を振った。
「東に空を飛んだり、馬車の数倍の速度で走る乗り物があるという話は聞いた事がない」
「何せ、地の果てですからな。何があるかはわかりますまい」
ホルオースはユマの素性を疑っているわけではなさそうだ。それもそのはずで、キダは既にフェペス家の奴隷であり、ユマは彼にとって他家の人間だ。そこまで疑ってかかる理由がない。だが、微かに興味を覚えたのか、ホルオースは目でヌルに問うた。だが、彼はそれ以上会話を続けるつもりはないらしく、

「いや、良いのだ」
と、話を切り上げた。
「なあ……」
操縦席の中で背をあわせるような感じで、二人はへたり込んでいたが、それまでほとんど無言だったキダが口を開いた。
「待て。俺たちが脱走の算段をしていると思われたらまずい。ホルオースはこっちを見てるか？」
キダは恐る恐る操縦席から顔を出した。どうやらホルオースはヌルと話していてこちらを見ていない。
「いや、大丈夫だ」
ユマは小さく目を閉じると、
「どうして逃げなかった？」
と、キダに問うた。朝、ホルオースと二人きりで自分を迎えたキダを見たユマは、まずそれを疑問に思ったのだ。
「俺が逃げると、お前が殺されるだろう？」
キダは、ユマの目を見ずに言った。ユマは信じられない言葉を聞いたように言葉を失っていたが、徐々にキダの言ったことが染みてきたらしく、深く頷いた。
「さて、どっちから話そうか？」
オロ王国に至ってからの、互いの身の上を知らねばならない。キダの話は長そうだと思ったユマは、まずは自分のことから話した。
「お前は運がいいな……」
キダが恨めしそうに言った。恨めしそう――では済まされない光が彼の目に灯ったのを見て、ユマはこれまでのキダの苦労が並々ならぬものであったのだろうと想像した。ただ、ユマが車を捨てたことに対して、キダは感情をあらわにして、
「なんてもったいないことをするんだ！」
と、声を荒げたため、ユマは驚いてキダの口を塞いだ。
「わかってる。自分でも馬鹿なことをしたと思ったよ。でも、ああ

しなけりゃ今頃飢え死んでるか、野生の猿にでもなっていたよ。それに、この試合さえ乗り切れば伯爵が車を取り返してくれる。それを売っぱらったら、かなりの金になると思うぜ」
いつまでも財産として保有するつもりのないところが、ユマはまだ賢いと言えた。燃料が有限である以上、持っていても宝の持ち腐れでしかない。錆付く前に高値で売ったほうが遥かに良い。
ユマの言葉で興奮が止んだのか、キダは自分の身の上を語りだした。
「最悪だった」
キダによれば、彼はユマが消える瞬間を見たらしい。
「突然、周囲が真っ白になった。雷が落ちたのかと思った」
ユマが光に包まれるのを見たキダが思わず車を止めると、周囲が異様な光で満たされるのを感じた。それが止むと、今までユマの車があった場所は何もなくなっていて、ただ地面に黒ずんだ跡があった。ほんの十センチ程度の炭くずのような跡だった。驚いたキダが、車外に出てユマの姿を捜すうちにそれを発見したのだが、彼がその黒丸の傍によると、突然、恐ろしい力でその場所に引っ張られて、宙に浮いたような不快感と共に気を失った。
キダは身ひとつでオロ王国に迷い込んだ。

第二章「闘士衝冠」（7）

キダが現れた場所は、ユマと違って、王都から少し北へ抜けた先にある集落の近くだった。

着の身着のままで集落に入ったキダは、集落の長に保護されたが、その怪しい服装もあってか、冷遇された。

それでもユマとは違って早々に住居を手にした彼は幸運だったが、集落に術士がやってきた折に、邪教の信者であると告発された。ユマが思うに、王都は異教に対しても寛容であるから、キダの持つ知識がその術士の縄張り意識を刺激したのだろう。

既にキダは源精に憑（つ）かれていたが、弁明の無駄を早々と悟った彼は、牢に放り込まれる前に集落を出ることを決意した。南に大きな都市があることを知ると、衣服を売って食を調達し、王都を目指して旅に出た。この点、キダの逞（たくま）しい行動力はユマのそれを凌駕していたが、それだけ危険と遭遇する確率も高い。道中で夜盗に遭ったのだ。身包みを剥がされるだけでは済まず、彼は奴隷市場に売られた。

地獄に落とされたようなキダの、それからの生活は凄惨だった。犬畜生のように檻に入れられて陳列される日々である。食事をするのも用を足すのもその中で行ったため、悪臭で気が狂いそうになった。食事と言ってもジャガイモを一切れ口にすれば良い方で、無造作に檻に放り込まれるそれに奴隷どもが群がり、壮絶な争いとなった。痩（や）せこけた少年から食を奪い取ったキダは、

「許せ……」

といって、泣きながらジャガイモを齧（かじ）った。その内、糞（くそ）の臭いもしなくなった。

ある日、やはり食事を巡って壮絶な乱闘となった。あたりの奴隷を殴り飛ばしてジャガイモを手にしたキダは、

「畜生め。畜生だ、俺は。畜生に繋がれた畜生だ！」

といって、檻の外に立つ看守に向かってジャガイモを投げつけた。
「剣をよこせ。お前ら全員、斬り殺してやる！」
看守はキダを引きずり出すと、数人でよってたかって殴りつけた。それでもキダは叫ぶことを止めない。だが、彼の震えるような怒りは一人の人間の興味を惹いた。
クゥである。
奴隷を物色するために市場に来ていた彼女は、しばらくの間、物珍しげにキダを眺めていたが、何を思ったのか、彼の方へと足を運び、
「この者を……」
と言って、キダを買った。彼はその日からフェペス家の所有となった。
クゥがキダに興味を抱いたのは、彼に剣の心得があることを見抜いたからだ。彼女がそのことを問うと、
「はっ、よくわかったな……」
と、キダは唾を吐いた。すぐさま近くにいた従者によって叩き伏せられたのは、言うまでもない。
クゥはキダの気性の荒さを買っているようだった。彼が剣をやると聞いて、
「ふふ、私に勝ったら、開放してあげる……」
と、冗談紛れに言った。闘士としての自信と誇りが、そう言わせるのだろう。
キダはこれを真に受けた。
彼はクゥに気に入られていたせいか、彼女の護衛にまわされた。最初に剣を持たせたとき、彼が奴隷の長を見事に叩き伏せたからだ。
それから数日も経たない間に、キダはクゥに牙をむいた。闘技場から出てくる彼女を襲ったのだ。喉元に剣を突きつければ、それで勝ち――と、思っていたのだが、彼はしくじった。クゥの力量を見誤ったというより、あまりにも無防備に背を向けるクゥに対して、一瞬だけ躊躇してしまった。

キダが剣を突き出したのは、クゥが振り返った後だった。彼の放った剣刃はいとも容易くかわされ、気づけば地に伏した自分の喉下に剣先が伸びてきた。

「無礼者！」

さすがのクゥも、飼い犬に手を噛まれたとあっては、キダを許すわけにはいかなかった。彼は奴隷の中でも最下級の身分に落とされた。それだけではなく、罰も与えられた。

「罰？」

と、ユマが話の腰を折った。

「これさ……」

キダは裾をまくって自分の踵（かかと）を見せた。朱色の刺青が施されている。

「あの女の魔術だよ。主人の意に反して走れば踵が砕ける。そういうものらしい。お前はホルオースが俺を監視していると思っているようだが、もともと無理な話なんだよ」

「まさか……」

最初はキダもそう思っていたが、意を決して夜中に脱走しようとしたところ、少し走ったところで踵が裂けるような痛みに襲われた。

この時、キダはクゥに無用の情けをかけた自分を激しく悔やんだ。クゥの剣術は優れているが、この国の剣術自体がまだ体系化とは程遠く、どこか荒い。キダがクゥに勝つ見込みは十分にあった。だが、もうクゥに挑む機会は二度と来ない。

それから、キダの目から生気が消えた。クゥは意気消沈した彼への興味を失ったらしく、やがて声をかけることもなくなったが、

「そこにお前が現れた」

と言ったとき、キダの目が光った。ユマが王都を訪れたとき、クゥに追従していたキダは、車上にユマと思しき人物を見つけたが、確信を持てず、そもそも奴隷の身分である以上、気安く他家の者に声をかけられない。だが、幸運にもユマは闘技場にあらわれた。キ

ダは、自らにとってこれが最後の幸運であるような気がした。
（こいつ、やっぱりしぶといなぁ）
ユマはキダの粘り強さに感嘆しそうになった。自分ではとてもキダのようには出来ない。

「まだ動かせんのか？」
沈黙したままの竜機に痺れをきらしたヌルの声が響くと同時に、二人の体験談は打ち切られた。
「動かすも何も、ハンドルすらないじゃんよ。これ、壊れているんじゃないか？」
ユマは雑談をごまかすように声を上げた。するとホルオースが寄ってきて、
「ハンドルが何かは解しかねますが……どう動かすかは術士ごとに違います」
と、奇妙なことを言った。
「要は想像です」
術士にも色々な流派があって、例えば火術士は火の力で竜機を動かそうとするため、火術を司る両手を操縦席に埋めるという。他にも土術士は足で操縦するという。なるほどこの操縦席を覆う柔らかい粘土のような物質だとそれも出来ようが、ユマは術士ではない。
「まずはやってみて下さい。クゥ様が貴方を術士であると仰いましたことに偽りはないはずです」
ホルオースが何やら自信ありげに言うので、ユマは閉口してしまった。
彼はその場に座り込むと、
「これが巨人だったらなぁ……」
と呟いた。キダが小さく嗤った。
「懐かしいな。お前、猿みたいにやってたからな」
「そんな、猿に全戦全勝してたゴリラはどいつだよ？」
ユマが言う巨人とは無論、言葉どおりの意味ではなく、アカアか

ら教わったことでもない。彼らが神隠しに遭う前、元の世界で遊んでいたビデオゲームの略称である。「慈悲なき巨人」という題名で、巨大なロボットに搭乗したパイロットに扮するアクションゲームだ。球形の筐体（きょうたい）の中に専用の操縦席があり、前方と左右、それに上方の液晶スクリーンに操縦席からの視点が映し出される。ちなみに、ユマが悪事に手を染めるきっかけとなった話は、この筐体で賭けを行った際に、負けたユマがキダに持ちかけられたものだ。

懐かしい――と、キダは言ったが、二人が最後に巨人で遊んでから一月も経っていない。それほど互いに多くの体験を、この短期間に重ねてきたわけで、あの頃には戻れないという現状が、彼らの心に水を落としたのかもしれない。

「想像……ねぇ」

ユマが思い出したのは、かつて賭けを行ったキダとの対戦だ。あれから自分の人生が狂い始めたような気がする。その時の対戦で勝利していれば、キダは老人から金を騙し取るような悪事に自分を誘うようなことはなかったかもしれない――というのは、ユマの都合の良い想像だろう。

（あの時は開幕でこけたんだ……）

ゲームが始まるや否や、いつもはしくじるはずのない巨人を発進させる操作を誤り、それが後まで尾をひいて、キダから主導権を奪い取ることが出来なかった。

――何か、賭けようか？

というキダの台詞が重圧となり、操縦桿を手に取るユマの判断力を鈍らせたに過ぎない。

（もっと、こう……）

ユマは虚空を見ながら、その場面を再現した。既に自分がどのような状況に置かれているかは、忘れている。

操縦桿を手前に引いて、ゆっくりと巨人を立たせる。

（焦るな。重心が安定するまで動いちゃダメだ）

少し待ってからユマは操縦桿を前に倒した。キダとの対戦ではこ

こで焦って転倒してしまった。その隙に背後に回られてキダに攻撃されたのだ。
次に左右の液晶に照らし出されたレーダーを確認し、索敵を行う。巨人は歩き始めている。ユマには、背後を取ろうと回り込んでいるキダの姿がありありと見えた。
と、その時、
「ユマ。おい、聞いてるのか？　ユマぁ！」
キダに揺すられて初めてユマは我にかえった。視界が大きく揺れている。
ユマは、自分の乗る竜機が歩き出していることに気づいた。
「おお、ははは……こりゃあ、すげえや！」
よく見ると、自分の手は操縦桿を握ったままだ。粘土のような操縦席の内壁が盛り上がってユマの望む姿を形作っている。この粘土のような物質は人の意思を感じ取る力があり、ユマが操作しやすい形を念じれば、それに合わせて姿を変えるのではないか。術士によって乗り方が違うというのはそういうことで、また、術士と竜機の間で意思の伝達を行うのは、魔力などという抽象的な力ではなく、人の意思を司る源精なのではないか――と、ユマは揺れる操縦席で想像した。

「おや、動きましたな……」
と、ホルオースが言う前に、既にヌルは驚愕の表情を浮かべていた。竜機がうなるような音を上げて立ったかと思えば、すぐに歩き出し、果てには軽快に走り出したのだ。ユマとキダは操縦席で子供のように歓声を上げている。その姿からも、彼らが竜機を動かすのが初めてであることは疑いようがない。
「東方の術士は、なるほど得体が知れませんな」
ホルオースはヌルに言った。彼がユマと決闘するクゥの配下であることを考えると、敵であるユマを応援するのは奇妙だろう。ただ乗りこなすだけでは、クゥには及ばない――という自信があるのだ

ろうか。
「これで、試合になります」
といったところで、ヌルは彼の思惑を理解できた。クゥが負けることは万に一つもありえない。要は試合にこぎつけさえすれば、フェペス家は容易く故地を奪回できる。
昨夜、ホルオースが不遜にもローファン伯に突きつけた条件であるティエレンの地は、王都から北東へ百公里ほど離れた寂れた街で、伯爵にすればこれを失ったところで痛くも痒くもない。
だが、闘技に光王から賜った土地を賭けるというのは異様と呼べるもので、光王が試合の許可を出したとなると、ローファン伯は死ぬ気でティエレンを守らなければならなくなる。ローファン伯がそれを理解していれば、今頃は息のかかった者が宮廷で光王に試合の中止を言上している頃だろうが、ヌルの見るところ、彼は今回の試合を機にフェペス家の息の根を止めようとしているようにも見える。
（あのような小家にはかまいまするな！）
身分の違いもあって、ヌルは政治向きのことをローファン伯に告げることが出来ない。どう考えてもこちら側のリスクが高すぎるように思える。フェペス家は勝てば故地を得、負ければクゥが奴隷の身分に落とされる。だが、ヌルの仕えるヤム家は負ければ土地を失うが、勝っても得るものはほとんどない。この度の試合は、道を歩く者が小石に喧嘩を売られたに等しく、ヌルとしては中止するに越したことはない。この点、皮肉にも彼とユマの目的は一致していた。勿論、両者ともそれに気づいてはいない。
ユマはしばらく竜機で闘技場を歩き回ったが、キダと交代すると、竜機はぴくりとも動かなくなった。
「嫌われたな」
と、ユマが笑いながら言うと、キダは不愉快そうに鼻を鳴らした。
――ほほ……
誰かの笑声が聞こえた気がしたユマは、背後を振り返った。小さな泉が、よどんだ水を漂わせている。

「お嬢様が屋敷を抜け出してきたかな？」
あのアカアならやりかねない――と、ユマは小さく笑った。お嬢様――と、聞いてキダの表情が曇った。彼にとってお嬢様と呼ぶべき存在は、クゥなのだ。

第二章「闘士衝冠」（8）

二日目には、キダもユマと同じように竜機を立たせることが出来るようになった。ここで、本来の配置である、ユマが脚部、キダが腕部の操作に専念することになった。

どちらも動きがちぐはぐながら、どうにか呼吸が合ってきたところで、彼らに声をかけた者がいた。

アカアだ。

闘技場への入場を禁じられている彼女が、どうしてここにいるのだろう。

「ローファン伯からの使いで参りました」

と、アカアは丁寧にお辞儀をした。彼女の横に、紅い鎧を纏った女闘士がいた。どこか華奢な感じがするクゥと違って、背が高く髪の長い女だ。

「何だ。素人じゃないか……」

少し低めのかすれた声である。

（何だ。このごつい女は？）

と、その女にあまり良い印象を持たなかったユマだが、どこかで会った気がしなくもない。待てよ――と、記憶をたどった。

（あの日に、闘技場にいた女か……）

――どうして、この国の戦士は薄着なんだ？

と、ヌルと会話をした際に近くにいた闘士だ。ヌルが赤い四位冠をつけているから、あれは戦士ではなく騎士だ――と、返したのを憶えている。

「王宮名誉闘士のシャナアークス・オルベル様です。先生にはこの方のご指導を受けていただきます」

アカアの言葉を聞いたユマは、ヌルが、闘技場でユマがうかつな発言をしないように気を配っていたことを思い出した。なるほど、頭に王宮のつくような人物だ。さすがの伯爵も敬遠しよう。

シャナアークスはずかずかとユマの方に歩み寄ると、
「見世物の闘技でよければ、お前たちに教えてやろう」
と、大きな声で言った。
（うへぇ……憶えてんのかよ）
ユマは冷や汗をかいたが、
「よろしく……」
と、握手を求めた。すると、シャナアークスは腰にかけていた鞭を振り上げてユマの腕を打った。
「痛ぇ！　何するんだ！」
ユマが睨むと、女は低い声で威圧するように言った。
「分をわきまえろよ。王命でなければ、貴様のような屑の相手をするか！」
（屑だと……）
ユマは全身がかっと熱くなるのを感じたが、ここはこらえた。彼は容儀を正すと、
「よろしくお願いします」
と、頭を下げた。シャナークスはそれでも不満なのか小さく鼻を鳴らした。
（糞が。とんでもない女を連れて来やがって……）
ユマが恨めしげにアカアの方を見ると、彼女は「こういうお方ですの」とでも言わんばかりに、苦笑した。ユマは心のどこかが暗くなった。
隣のキダが言葉を発しないので訝ったユマが彼の方を見ると、何やら遠くを見るような感じで突っ立っていた。シャナアークスがキダに視線を移したので、
（おい……キダ）
と、ユマは肘でキダを小突いたが、それも終わらぬうちに彼女の張り手がキダの胸元を打った。小枝を勢いよく折ったような音が響いた。
「――ってぇ！」

キダが蹲るようにして咳き込むと、シャナアークスは間髪いれずに彼の鳩尾(みぞおち)を蹴った。シャナアークスは倒れこんだキダの頭を踏みつけると、
「よろしく」
と、威圧するように言った。キダは呻くようにそれに答えた。
「よし、早速はじめるぞ」
まさか挨拶もそこそこに特訓が開始すると思わなかった二人が顔を見合わせていると、
「私とて、暇ではないのだ。さっさと動け！」
と、シャナアークスは腰につけてあった鞭をとって鳴らした。ユマとキダが悲鳴を上げるようにして竜機に乗り込んだ。操縦席に着いた際にキダが、なあ――と声をかけてきたのでユマは振り向いた。
「当たりだな……」
口の片端を微かに曲げて、キダは笑った。ユマには彼が何のことを言っていたのか全くわからなかったが、先ほど彼がシャナアークスの豊かな胸元に視線を移したまま惚けていたことを思い出すと、すぐさま諒解した。
「おい、本気か……お前、足蹴にされたんだぜ？」
「男を足蹴にする女なんて、そうそういない」
「いい趣味をしてやがる」
ユマはからからと笑った。
「お前ほどじゃあない」
キダにそういわれた時、何やら期待を込めたまなざしを自分に投げかけるアカアの顔が映った。だが、ユマがキダの誤解を解く暇もなく、シャナアークスの特訓は始まった。

「何て女だ……」
台詞と一緒に青い息が出そうだった。一度の休憩もなく、鬼教官としか言いようのないシャナアークスの猛特訓にさらされたユマは、今こうして地に足をつけて歩いている自分が不思議なくらいだった。

彼は既にローファン伯爵邸に戻っている。帰ってきてからは食事も喉を通らない程度に疲労していたが、
「シャナアークス様から、きちんと食事をとるまで睡眠をとらせるなと仰せつかりました」
と、リンに言われ、ユマは胃袋に詰め込むように、ろくに咀嚼(そしゃく)もせずに食物を飲み込んだ。
訓練が始まったとき、ユマとキダを竜機に乗せ、また自身も別の竜機に乗ったシャナアークスは、
「はっきり言って、今日初めて竜機に乗ったような輩が、闘花と闘って勝つ見込みは全くない。試合まで五日。私が付いてお前たちを教えたとしてもだ。だから、基本操作を学んだら、次は実戦で己の知恵を磨け」
と言い、午前中は主にキダに竜機を用いた槍の扱いを教えた後、午後から模擬戦を行った。
「遅い。弱い。考えていない！」
シャナアークスは手加減して戦っているようだったが、当の本人たちは巨大な槍が自分の頭の横を掠める度、死にかけたと思った。ユマの操作は拙(つたな)く、キダの打ち込みは弱く、そして互いの連携がちぐはぐな上、各々の判断が鈍い。
「地道にやっていくしかない」
愚痴にも似た言葉をユマが呟くと、
「馬鹿野郎！あと五日だぞ」
と、キダが激しい口調で言った。ユマと違って剣道で己を鍛えた経験のあるキダは、彼の甘さを許さなかった。互いに連携がとれず、不満といらいらをつのらせたことも一因ではある。
最後には互いに口もきかなくなった。いや、これには疲労によるものが大きいだろう。
（昨日より今日、今日より明日だ……）
相変わらずの楽天的思考によって今日という一日を締めくくったユマだったが、キダは彼と違って、フェペス家に戻った後も、どう

すればシャナアークスに勝てるのかをずっと考えていた。キダはクゥの試合を見たことはないが、彼女が竜機で訓練しているところを見たことはある。その時のクゥの動きを思い出してみても、シャナアークスより遥かに強いという印象はない。シャナアークスに勝つ実力があれば、クゥにも勝てるはずだ。ただし、人を見くびる癖のあるユマにはこのことを言わなかった。

（ユマには勝負というものがわかっていない。そもそも、自分を鍛えるということがあいつにはない）

人は目的を達するために努力をする。それは確かに地道な作業だが、ユマの考えるように人間が日を重ねるごとに成長するのならそれで良い。だが、前があって後ろがないということがないように、人は後退もする。細かな進退を繰り返しながら人間は進化してゆく。そのくらいのことはユマにもわかっているだろうが、彼には人間が進退する生き物であるという思想はあっても、進退の内容にまでは考えを及ぼしていない。

キダにとって、成長とは閃きである。人は実は常に成長しているのではなく、突然、変わる。今まで蓄積されたものが、閃きという現象で放出される。短距離走の選手は、徐々にレコードを縮めてゆくわけではなく、彼らは練習を積み重ねる内に、ある日突然、速くなる。それは、できるだけ大きく、強く成長したい――という人間の願望から来るものではないか。地道にという言葉を好んで使う人間ほど、怠け者はいないと、キダは思っている。貪欲なほどに自らを高めたいと、その他の全てをかなぐり捨ててでも、強くなりたいと思う険しさがなければ、人は真に成長することはない。人は、時を経れば人格が変わるが、それは成長とは呼べまい。

（だから一年も浪人をしたにも関わらず、三流大学しか受からないんだよ）

高校を卒業して、すぐに就職したキダは、ユマの甘さに嫌悪を覚えるときがある。今がそうだった。

ユマという人間の不思議さは、次の日になれば、まるでキダの心中の声を察したかのように険しい表情で模擬戦に望んだことだ。彼がキダの思想を理解しているとは思えないからこそ、余計に不思議なのだ。

（こいつはこいつで考えているらしい）

相変わらず楽天的に――と、キダは付け加えた。

ユマとキダは互いに尊敬しあうような仲ではない。むしろ互いのことを心中で軽蔑しているふしがある。一言で表すと悪友だが、キダはユマと付き合っていると、時々、

（おや？）

と、思うことがある。それはユマの独特な思想を垣間見た瞬間であり、それが思考となって一つのかたちとなった時、キダが先に述べたような閃きとなって顕れたりする。こいつはもしかすると天才なのではないか――と思ったりもするが、平素の言動があまりにも俗人過ぎて、キダに限らず、ユマに接する人間の多くがこの一事で彼のことが理解不能になる。

――他人のことがわかる奴なんて、いないさ。多分な。

ユマが、多分――と、語尾に付け加えるとき、彼が考えていることとは逆のことを言っているのではないかと疑ったことのあるキダは、ひょっとするとユマの閃きは、この矛盾の産物ではないかとも思ったりする。矛盾した理論は存在を許されないが、矛盾という概念は創造の源となる力を持っている。矛盾が何かを創造したとき、それは矛盾ではなくなる。

「足が要らないかな……多分だけど」

竜機の「機」を担当するユマがそう言った時、キダは思わずユマの顔を見た。より速く走りたい――というユマの心中の声が一つの閃きとなって外界に放たれた証ではないか。

「どういうことだよ？」

キダにそういわれて初めて、ユマは自分の言ったことの意味を理解したようだった。

（他人を壁か鏡くらいにしか思っていない）
ユマという人間にとって、他人ですらが自分を見るための鏡であるのかもしれない。だが、そういった態度は鏡にされる側にしてみれば、不快でしかない。ユマは別に著しく礼儀に欠ける人間ではないが、時々見せるこういった素振りがユマ本人を不幸にしている。要するに少し嫌味なのかもしれない。それでも随分と愛嬌のある方だから助かっているともいえる。
「揺れだ。揺れが悪い」
ユマの言うとおりだろう。二本足をつかった竜機の歩行は上下運動が激しく、その揺れが二人の操作の妨げになっている。
「キャタピラでもつけるか？」
キダが冗談半分で言うと、ユマは大きく頷いた。
「出来るかもしれない……」
と、思いもよらないことをいったので、キダはユマの顔を覗き込んだ。

第二章「闘士衝冠」（9）

「シャナアークスを見ろ」
シャナアークスが駆る竜機は、ユマたちのそれに比べてやや小さい。だが問題はそこではなく、彼女の操縦方法にあるという。
「確か、あいつは火術士とか言ってたな」
キダが思い出したように言った。火術士といっても、何もないところから火を熾したりするのを見たわけではない。キダに限らずユマも魔法のようなものを実際に見たことはなく、彼らが駆る竜機がそれに近いが、原動力が不明なだけでこれですらも立派な機械だ。要するに二人にとって、シャナアークスは火術闘士というより、竜機操縦士である。
ホルオースがかつて言ったように、シャナアークスは操縦席に両腕を突っ込んで直に魔力――ユマが思うに源精を介した何らかの信号――を送り込んでいる。それを受けて竜機が動くのだが、彼女の竜機はこちらとは造りが違うのか、エンジン音にも似た轟音を伴う上に、竜機の踵の部分から淡く火を吐いている。駆け出すときに爆発するような音が聞こえるのは、決して飾りではなく、その力を利用して竜機の機動性を増しているのだろう。
ユマが注目したのは、竜機自体も操縦席と同じく乗る者の意思によって形を変えるのではないかということだった。
「やってみる価値はある」
と、ユマが言った。キダも彼の想像に興味を覚えたらしく、
「よし！」
と頷いた。
（要は、想像力だ）
ユマはホルオースが言ったことを思い出していた。彼の言葉は何も竜機の操作方法に関してだけではあるまい。
（キャタピラは無理だ）

具体的な想像が出来ない。何の根拠もなく、それを思い描き、実際に形作ったとしても、多分動かないだろう。他に揺れを解消する方法があるのか。竜機を浮かせるという手もあったが、これには多大なエネルギーが消費されるに違いなく、結局はシャナアークスと同じように加速に転化したほうが効率が良い。

（これしかない）

と、ユマが思い定めたとき、竜機の形が変わった。

（本当に素人か？）

シャナアークスは、二人を相手にしながら、内心舌を巻いていた。彼女を驚かせたのは、二人の適応の早さだ。竜機に乗って三日目の者が、これほどに巧みな操作を行うものだろうか。だが、実戦経験に乏しいのは目に見えて明らかであり、そこでシャナアークスが得た結論は、

（竜機に似た何かを乗った経験がありそうだ。しかも一度や二度ではない）

というものだった。二人は乗り物に乗るということに慣れている。ということは決して身分は卑しくなく、アカアが言っていたように、本当に東方の豪族かもしれない。学問のためにオロ王国を訪ねたというが、豪族の男が単身でそれを行うはずもなく、何か悪事を働いて追放されたのかもしれない。どちらにせよ、卑しい素性ではあるまい、とシャナークスは考えた。

他に、驚いたのは、二人が高速で動く乗り物にすぐさま順応したことだ。それに、操縦席の異様な光景が彼女の好奇心を大いに刺激した。

「舵をとっているのか……奴らは馬鹿か？」

シャナアークスが想像だにしないことだった。魔力を直に伝えれば竜機はそれだけで動く。なのに二人――特にユマは複雑な機器類を作り出し、それを使って竜機を動かしている。しかも、手馴れている。シャナアークスは風の噂でユマが馬車よりも速い乗り物を持

っていることを聞いたが、ここにきてようやく噂を信じる気になった。ちなみに竜機は乗用にはほとんど用いられない。馬車のほうが遥かに利便性に長けるからだ。火術士や風術士の扱う竜機は確かに速いが、魔力の消費が激しく、長距離を駆けることは出来ない。ただし、王宮直属の精鋭部隊には竜機のみで構成されたものがわずかに存在する。彼らが大陸最高の術士たちであることは言うまでもない。

さて、シャナアークスの眼前に広がる光景に戻ろう。

ユマたちの乗る竜機の足が、徐々に姿を変え、やがて両足の先に四つの車輪が形づくられた時、シャナアークスは妙な高揚感を覚えた。

――実戦で己の知恵を磨け。

と、訓示したことを実践した二人に驚いたのだ。どれほど物分りの良い者でも、何かを閃くにはまだ早すぎる。

ユマの竜機が動いた時、シャナアークスの驚きは戦慄に変わった。凄まじい速さで飛び出してきたそれは、瞬く間に眼前に現れ、シャナアークスの槍と激突した。辛うじてそれをさばくと、ユマの竜機は大きく反れてあさっての方向に突進し、壁に激突して止まった。ユマは竜機の外に放り出され、光精の泉に落ちた。

（地面を滑ってきた……）

右足を踏み込むと同時に加速し、左足で踏み込めば更に増す。それを繰り返して動くのだが、操縦席がほとんど揺れていなかったためか、キダの放った槍が恐ろしく正確だった。

一瞬、腹の底が熱くなった。竜機を乗って数日の初心者に肝を冷やされたのが不快だった。

だが、同時に自分でも気づかぬ間に、彼らの成長を認めていた。

（形になるかもしれない）

これで、自分より腕が劣るくせに闘花などと呼ばれていきがっているクゥが、奴隷に落ちぶれる様を見られるかもしれない。シャナアークスは性格に粘性を持つ方ではないが、闘技場でクゥとすれ違

うたびに彼女が自分に投げかける視線に侮りがあることに怒りを覚えてきた。
（弱小貴族の娘に過ぎない身で……）
シャナアークスの方は代々王族に使える身分で、彼女自身が騎士爵を持っている。対してクゥの家は当主が騎士爵であり、クゥ自身が冠をつけるにふさわしい身分にあるわけではない。
クゥは確かに人気があり、戦績も良いが、彼女の人気は容姿によるところが大きく、闘技場の経営権を持つ王宮も彼女に肩入れしているふしがあり、最近では格下の相手と戦ってばかりいる。一度、彼女に試合を申し込んだが、それは成立しなかった。クゥという存在はシャナアークスの闘士としての誇りを傷つけたのだ。
（クゥは喧嘩を売る相手を誤ったかもな）
シャナアークスは小さく嗤った。嗤った後で、泉に落ちたユマが中々浮かんでこないことに気づいたが、自分にわずかな恐怖を感じさせた男を、すぐには助けようとしなかった。

――ほう、中々やるな。だが、お前は土に嫌われているぞ。
誰かの声がした。女の声だったが、誰のものだかはっきりとわからない。だが、どこかで聞き覚えがある。アカアか、リンか、クゥか――
（リンか、クゥならいいな）
と、ユマは透き通るようなクゥの肌を思い出した。やがてクゥの姿は色黒で長身の女に変わった。シャナアークスだ。
「あっ！」
声を上げた口に、勢いよく水が流れ込んできた。ユマはこの時、自分が泉に叩き落されたことを思い出した。あがきながら、上方に手を突き出すと、その手をつかまれた。
泉から引き出されたユマは、飲み込んだ水を吐いた。
「今日はここまでにしよう」
まだ昼過ぎだが、シャナアークスの目にはユマの体力が限界に近

づいているように見えた。
「まだ、やらせてくれ……今の感覚をおぼえておきたい」
（甲斐性がなさそうな面をしているが、中々殊勝なことを言う）
ユマの言葉は、シャナアークスを喜ばせた。百戦錬磨のシャナアークスが教えても、当事者にしかわからぬ感覚がある。教え子の感性を尊重するのがよき教育者というものだろう。たとえユマたちを下賤なものと見くびってはいても、彼女は彼女なりに自分の務めを果たすつもりなのだ。
だが、ユマの言った「今の感覚」というのは、氷上を滑るような竜機の操作ではなく、壁面に激突した時の衝撃のことだった。
（あれくらいで振り落とされるようだと、本番で何も出来ない）
そういった彼の脳裏には勝負とは激戦であるという前提が置かれている。勝負事にこういった観念を持つ人は、かえって押し切るべきときに押し切れず、勝負弱い。あえていえば、圧倒的な力でクゥを圧殺するという想像がユマには出来ない。それは優しさというべきだが、闘技場では弱さの一言で片付けられてしまう。キダが感じるユマの甘さとはこれだった。振り落とされることに慣れるよりも、より速く竜機を走らせることのほうがよほど重要だというのに、ユマの心の目はそちらに向かない。
「よし、良いだろう」
模擬戦は再開されたが、その後、ユマの乗る竜機には先に見せたような冴えはなかった。シャナアークスはユマが激突に怯えていると思い、
「先の威勢はどうした！」
と、声を張り上げたが、それでも変わらなかった。
（所詮は田舎あがりよ……）
シャナアークスの目に侮蔑の光が映った。それを見たユマは、かつてアカアに人並みの人格を期待した自分がいたことを思い出した。
竜機を降りたとき、ユマはホルオースの元に戻ろうとするキダに駆け寄り、

「明日、試したいことがある。剣道を思い出しておいてくれ……」
と、言った。ホルオースには明かせないことだと思ったキダは、あえて疑問を口にすることなく、
「わかった」
と、返した。
（あと、四日か……）
風が吹くと、舞い上がった闘技場の砂が口に入った。

――家に帰ったらさっさと休め。夜遊びが過ぎてティエリア・ザリになるなよ。
闘技場を去る間際、シャナアークスが言い捨てた言葉がユマの頭にこびりついている。
「ティエリア・ザリというのは何だ？」
いつものように蒸風呂で一日の疲れをとっていたユマは、髪の手入れを任せるついでにリンに問いを投げた。
ほんの軽口だったのだが、ユマは周囲の空気がすっと下がるのを感じた。リンは明らかに動揺していた。
「どこでその名前を？」
「（へぇ……人名だったのか）闘技場の前でフェペス家の従者だかに言われたよ。ヤムの奴らはティエリア・ザリの肉を食っただけではなんとやらってね」
ユマは危うい話題に触れてしまったことに気づき、気まずい空気が流れ始めたのを後悔し始めた。どうにもローファン伯爵家でこの名は禁句らしい。
リンは若い学者――自称だが――の表情から見て取ったのか、ユマの手をとって安心させるように、優しく忠告した。
「先生、二度とその名をこの家で口にしてはなりません。特に御館様の前では……」
「アカアは？」
「絶対になりません」

「あ、ああ……わかったよ」
リンの声色が重く凄みを帯びてきたので、ユマは思わずたじろいでしまった。

当然ながら、次の日も訓練は続く。
ユマとキダが操る竜機は、前日よりさらに精彩を欠いていた。一度見せた四輪の竜機も、速度が一定でなく、よく転んだ。最後の方になってようやく持ち直し、シャナアークスの槍をなんとかさばくことが出来るようになった。それでも不安定で、時折恐ろしく正確な動きをするかと思えば、槍さばきが全くなっておらず、またその逆もあった。
いわゆるスランプに二人が陥っているのではないかと思ったシャナアークスは一考した。
（一度、クゥの試合を見せておいた方が良いかもしれない。そういえば、明日試合があったな）
大事なローファン伯との賭け試合の直前に試合を入れるとは、クゥも二人を侮ったものだ――と、シャナアークスは小さな憤りを覚えた。このことは、彼女がユマとキダを気に入り始めた証拠だろう。
（異国人にしては、まだ骨のある方だ）
ふと、二人の方を見ると、何やら妙な事をしている。
キダが走っている。ユマが地面に線を描いて、その上を走っているようだ。キダは呪いのせいで全力疾走できないから、小走り程度だが、それでも踵が痛むらしく、
「これ以上は無理だ……」
と、音をあげた。
「いや、十分だ」
ユマがそう返したが、二人の会話は端から見れば大いに怪しむべきで、
（逃げる算段をしているのか？）
と、特にユマを疑っているヌルはそう思った。

シャナアークスも似たようなことを考えないでもなかったが、二人の表情には他人を欺いて逃亡を企んでいる暗さがない。
（逃げたらその場で斬ってやるが……）
と、人知れず妖しい笑みを浮かべた。キダはともかく、ユマは時折反抗的で、それが癇に障る時がある。ユマはあずかり知らぬことだが、シャナアークスはローファン伯とフェペス家当主から二人が訓練中に逃亡した場合の処分について一任されている。
「明日、クゥの試合がある。入場許可をとっておくから、明日の訓練の後、ユマは闘技場に残るように……」
シャナアークスが言うと、朝からほとんど言葉を発しなかったユマが顔を上げた。
「クゥは今の貴方と同じように、俺たちに負けるはずがないと思っているのだろうか？」
淀(よど)みのない声だが、刺すような鋭さがある。
「わからない。だが、あの女は勝負の相手を侮るほどに軽薄ではない」
嘘だな――と、ユマは思った。シャナアークスが一瞬、目を逸らしたからだ。
ユマの言わんとしていることがわかったシャナアークスは癇に障ったのか、
「クゥを甘く見ると痛い目にあうぞ！」
と怒声を発して、振り上げた鞭でユマを打った。
――お前こそ、油断しているじゃないか。
そういわれたと思ったシャナアークスは、明日の訓練ではユマに血反吐を吐かせてやろう――と、心中で毒づいた。
（俺たちは、お前の奴隷じゃない！）
ユマは肌が裂けるような痛みに耐え続けたが、最後まで詫(わ)びの言葉は吐かなかった。
クゥとの竜機戦まで、残り三日である。

第二章「闘士衝冠」（１０）

「あれは何だ？」
市場の一角が妙に賑わっているのを見たユマは、鞭を受けた肩をさすりながら、同乗するリンに声をかけた。ユマを闘技場に迎えに来た路上であり、ヌルは御者の横に腰を落ち着けている。
大きな幕が掲げられ、人々がそれに群がって騒いでいる。
貨幣が舞うように飛び交っているのを見たユマは、
（賭場だな。でも大っぴら過ぎる）
と、思ったが、ふと気づいたことがあり、馬車を止めさせた。
「リン、読んでくれないか？」
垂れ幕に書かれた文字を指差されたリンは、一瞬戸惑った表情を見せたが、
「クゥ、一・二。ユマ、二十四。引き分け、八・九……」
と、ユマの顔を見ずに言った。
「何だ。俺は大穴か。はは……」
それがユマとクゥの闘技に対するオッズであることに気づいたユマは、あまりの落差に空笑いするしかなかった。ただ、自嘲しているわけではない。それだけの技量の差はあって当然だとも思っている。主催者が全体の二割五分を懐に収めるとすれば、ユマの勝ちに賭けられたのは、簡単に計算しても全体の三パーセント前後だろう。
「これでも随分下がった。最初は五十倍はあった」
と、ヌルが感情を消した声で言った。
オッズが変動するということは、クゥが調子を落としたか、ユマに関する情報が流れているということだろう。あまりに差が大きすぎれば掛け金が集まりにくいので、主催者側が適当な情報を流しているのか、あるいは闘技場に出入りしてユマの特訓をのぞいた者がいたのかもしれない。
（これは使える……）

そう思ったユマは、ヌルの方を見て、
「当事者は参加できるのかな？」
と、訊いたが、
「無理だ」
と、即答された。
「だが、代人を立てて自分に賭けるのはよくあることだ」
ユマは馬車に飛び乗ると、そのままの勢いで伯爵邸に帰った。
出迎えたアカアをすり抜けるように屋敷に入ったユマは、自室から貴重な財産である毛布を取ってくると、あたりをきょろきょろと見回した。やがて、リュウの姿を見つけると、
「ちょっと出かけてくる」
と、彼を連れて再び街へと繰り出していった。アカアは何のことかわからずにきょとんとしていたが、リンの顔を見ても、首を横に振るだけで答えを得ることが出来なかった。
「所詮は田舎者ということです」
と、ヌルが忌々しげに吐き捨てた。

毛織物を扱う店で、毛布を売ったところ、金貨四枚を得た。買い叩かれるのを未然に防ぐために、
「俺は、ローファン伯に宿を借りている。実はローファン伯がこの毛布を買い取りたいと言ってきたんだが、どうも買い叩かれているようで、気が乗らない。伯爵以上の金を出すのならここで売っても良い」
と言った。伯爵がいくら出そうとしたのかは最後まで言わなかった。
「毛色が整いすぎて、気味が悪いくらいです」
商人が言ったが、機械が作ったのだから当たり前だ――と、ユマは心中でほくそえんだ。
「大金です。家が一つ買えます」
流石にリュウの言うことは大げさだと思ったが、商人は毛布の他

にも、値をつけたように感じる。
――俺はローファン伯に競り勝ったぞ。
とでも言えば――王都では言えないだろうが――ちょっとした箔がつくのかもしれない。ユマはこの商人が後で他の貴族に、毛布を金貨十枚で売ったことを知らない。
さて、賭けである。
ユマはリュウに金貨をつかませて全部自分に賭けるように言い渡したが、リュウは不首尾で帰ってきた。
「餓鬼の来るところじゃない――と、怒鳴られました」
金貨を見せるまでもなく帰ってきたリュウを、ユマは叱る気になれなかった。その場で金貨を見せれば、目の色を変えた主催者によって参加を許可されたかもしれないが、大人の遊びにリュウを無理にねじいれようとする愚かしさに、ユマは今更ながら気づいた。
「いいよ。帰ろう」
一度興味を失えば、未練を残す方ではないユマは、すぐさま帰路についた。万一、試合に負けた時の逃亡資金にすればいい――と、いつものように早い決断をしたユマの前に、蹲っている少年の姿が目に入った。

麻色のマントに身を包んだ、長い銀髪の少年だった。膝を抱くように路傍に腰を下ろし、空を仰いだまま微動だにしない。風が吹くと、白金のような髪がさわざわと揺れる。少年といっても、彼が男物の服を着ているからユマにも判別できたのであって、顔立ちは少女のようだ。
思わず撫でたくなるような形の良い小さな鼻と、くりっとした目が印象的な美童だった。
「伝説の魔導師……」
眼前を通り過ぎる際に少年の口から出た言葉が、自分に向けられていることを知ったユマは、思わず足を止めた。
――関わらんほうが良いぞ……

足を止めた瞬間に、誰かの声が聞こえた気がした。
（ここ数日、耳がおかしいぞ？）
幻聴なのか、源精によるものなのかよくわからないユマは、しかし忠告ともとれるその声に耳を傾けなかった。雑踏の中にいるのだから幻聴も何もあるまい――と思い直した。
銀髪の少年はユマが立ち止まったことに気づくと、空に向けた顔をそのままに、視線だけをユマに移した。少年と目が合ったユマは、一瞬、何かに貫かれるような感覚をおぼえた。それは悪寒にも似ていて、ユマの第六感もこの者と関わることを拒否しているように感じた。
得体のしれない幻聴や、自らの勘とは全く逆に行動するユマは、別に天邪鬼（あまのじゃく）なわけではない。天邪鬼な人間は大抵自分の感性のままに行動している。それが他人を意識した強烈な理性によって捻じ曲げられるだけのことであり、自分自身を意識して意志を変えることは天邪鬼とは呼ばない。だが、この時のユマは、まるで夜中の灯火に羽虫が集まるようにして、銀髪の少年に引き寄せられた。少年の容姿が他を圧倒して優れていたこともある。よく見ると、マントの下に着た服は小奇麗で、彼がただの奴隷や乞食（こじき）でないことを物語っている。
「今のは俺に言ったのかな？」
ユマが少年から目を離さずに言うと、少年は小さく頷いた。
「伝説の魔導師とか聞こえたんだが……」
少年は再び頷き、賭場に掲げられた垂れ幕を指差し、読み上げた。
「東方出身の伝説の魔導師ユマ。闘花クゥに挑む」
ユマは噴出しそうになった。賭場の主催者はあまりにオッズの開きが激しいので、素性の知れないユマを大きく見せるために苦心したのだろう。それにしても伝説の魔導師とは恐れ入る。
「お前、俺が誰だか知ってるのか？」
少年は更に頷いたが、
「お前じゃない。エイミーだ……です」

と、感情の色を消した声で言った。
「エイミー？」
女のような名前だな――とユマが思うと、エイミーはすっくと立って言った。
「エイミーは、男の子……です」
目に顔を擦り付けんばかりにエイミーはユマを凝視したが、背が小さく、全く届かない。必死に爪先立っている姿が、横で見ていたリュウの笑いを誘った。
目が紅（あか）い。ルビーのように見る人を吸い寄せる紅さだ。それを奇妙と感じさせないところに、エイミーの魅力のようなものをユマは感じた。
「エイミーが男の子だと、何が勿体無いの……でしょう？」
と、言われたとき、ユマは自分の耳を疑った。まるで自分の心を読まれているようだ。
――気味が悪い。
そう思うのが普通なのだが、エイミーの美顔が怪しさを妖しさに変えていた。ユマは彼に興味を持った。

「何故、こんなところで天を仰いでるんだ。雲でも数えてるのか？」
ユマはエイミーに対して最初に持った疑問を口にしてみた。
「主に買い物を頼まれた……ました」
エイミーは無理やり言葉使いを改めたような奇妙な喋り方をする。
「でも、お金が足りない」
と、エイミーは巾着のような形をした財布を逆さにしてみせた。金貨七枚が音を立てて落ちた。
「あっ……あっ……」
まるで予想していなかった事態が起こったように、エイミーは慌てて金貨を拾った。金貨の一つが円を描くように転がってからユマの靴に当たった。エイミーは逃げるバッタでも捕まえるような手振りで他の金貨を抑えている。

（おいおい、大丈夫かよ？）
ユマは苦笑しながら、足元の金貨を拾った。よく見てみると、ユマが持つ金貨より傷が少なく、質が良い。
「ふぁ……」
コン――と、金貨を追いかけていたエイミーの顔がユマの膝に当たった。ちょうど鼻を当ててしまったらしく、目を潤ませたエイミーが上目使いで仰ぎ見たとき、
（ヤバイ、変な趣味に目覚めそうだ……）
と、ユマは腋（わき）の下が寒くなるのを感じた。
「金が足りないのか。金貨七枚もあって何を買うっていうんだ？」
「箒（ほうき）……」
エイミーは手にした金貨を数え終わると、無造作に財布にしまった。
「ほうき？　あのゴミを掃く箒のことか？」
エイミーが頷くのを見たユマは、こいつの主は何と言う贅沢な奴だ――と、呆れた。金貨四枚で家一軒とリュウに言われたユマは、家二件以上の価値がある箒とは魔女箒か何かか――と、想像した。
「主（あるじ）は箒遊びが好き。でもペイル産の最高級のものじゃないと叩き甲斐が無いって……」
ペイル――という地名にユマは混乱しない。西に海を越えたオロと同等の規模を持つ海洋国家であるという話をアカアから既に聞いているからだ。
「箒遊び？　それに叩くって……何を？」
「エイミーを、叩くの……です」
（うわ、我ながら鬼畜な想像をしてしまった）
ユマは自分の下衆な一面に嫌気がさしそうだったが、遊びという一語を思い出して、もしかするとエイミーの主は子供なのではないかと思い当たった。
――で、いくら足りないんだ？
と、言い出そうか迷った。善意で恵んでやるというのは、どうに

も自分のがらではなく、貸すにしても同じことだ。確かにエイミーを見ているとそうしたくなるが、下手な情けは相手を傷つけるばかりか、憎悪の対象にすらなることがある。
少し考えたユマは、やはりエイミーが哀れになったのか、口を開いた。
「金貨四枚までなら貸そう。ただし、一つ条件がある」
エイミーの目が上がった。そこに歓喜の色が見えなかったことにユマは多少、失望したが、感情表現がいかにも苦手そうなエイミーであるから、それも仕方が無いだろう。あるいはこの美童はあまりに意外な事を言われて驚いているのか――と、想像した。
「俺に返す前に金貨四枚を全額、魔導師ユマの勝利に賭けろ。勝ち分を含めて俺に返してくれるのなら貸してやってもいい。勿論、魔導師様が負けた場合は、返す必要は無い。どうだ？」
言い終わった後、貴族の使い走りに過ぎないだろうエイミーに、そんなことを決定する権利があるはずも無いと思い直し、自分の酔狂癖がまた出た事実に我ながら呆れた。
エイミーが突然、猫が物音に驚くようにして首を上げた。目を大きく広げ、一瞬だけ周囲を見渡した。彼の視線が動くたびに、空気が巻かれて風が吹くようである。心なしか、紅い目がほのかに光ったように見えた。
「おい、どうした？」
ユマは思わずエイミーの視線を追って振り返ったが、そこにあるのは雑踏ばかりで、賭場の垂れ幕が風に引き剥がされる様にして落ちた。
再びエイミーに目をやったとき、ユマは確かに不気味な何かをこの少年に感じた。
エイミーは、うん、うん――と何度も頷くと、少女のように細い手を差し出して、
「金貨……頂戴」
と呟いた。ユマが金貨を渡そうとすると、リュウが慌ててユマの

裾を引っ張った。
（相手の素性も知らずに、どうして大金を貸し与えるのですか）
リュウのささやきが聞こえていたのかどうか、エイミーは金貨を渡そうか躊躇いを見せたユマに向かって言った。
「ガオリ侯爵……」
「それがエイミーの主か？」
エイミーはしばし考えるような素振りを見せた後、小さく頷いた。
「そうか。俺はローファン伯に宿を借りている。さっきみたいに金貨を落とさないように、気をつけろよ。じゃあな……」
エイミーが別れ際に、
「ユマ、さよなら……」
といったので、無愛想な少年だが挨拶くらいは出来るようだ――と、ある意味ユマを安心させた。
（ここは普通、『ありがとう』だろうに……）
やはりどこか不思議な少年だ――と思ったユマだったが、互いの望みを果たすための取引をしたのであって、ユマが一方的にエイミーを助けたわけではない。もとよりそのつもりで話を持ちかけたはずなのに、相手に謝意を要求するのはあつかましいと言うべきだろう。ユマという人間が持つ美点の一つが、こういった自分の過ちを素直に認め、相手が正しいと言い切ってしまうことで、今がそうだ。気が弱いわけではない。むしろ自我が強く観察眼に欠けるからこそ、こういったわざとらしい思考回路が必要なのだ。ユマの場合、そこに自らの容儀を改めるという発想が抜けている以上、これは確かに美点であるには違いないが、偽善であるともいえる。
気分を改めたユマが振り返って小さく手を振ると、エイミーは言い直すようにして、再び別れを告げた。
「伝説の魔導師、さよなら……」
ユマは本当に金貨が返ってくるか、少し不安になった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5984z/

貴く翔べ

2011年12月27日21時51分発行